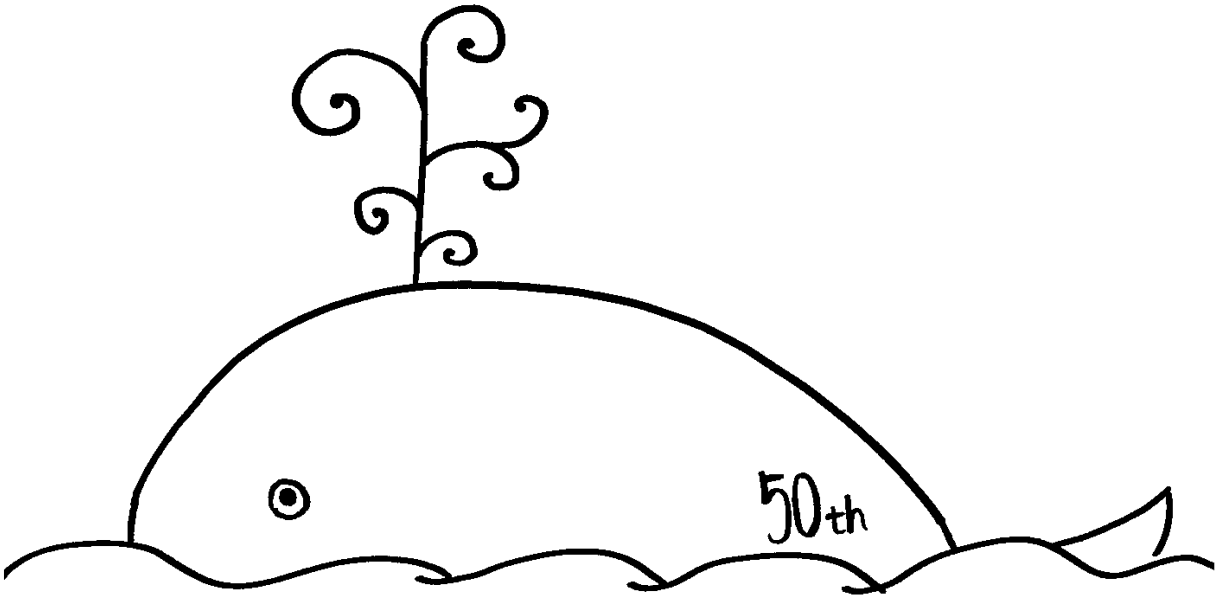


50周年記念誌

重度肢体不自由児母子キャンプ
重度肢体不自由青少年と親のキャンプ
重度肢体不自由青少年のキャンプ
日本平キャンプ
高木記念キャンプ
高木記念山中キャンプ

はじめに

「敦盛」の一節、『人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻の如くなり…』とは言いますが、人間界での50年といえばかなりの長期間であることは事実でしょう。

50年前にこのキャンプをスタートした当時は、交通手段も社会の認識も今ほどの理解はなかったのではないかと思います。そんな環境下でこのキャンプ事業を企画・運営されてきた先輩方に敬意を表します。

50年の歴史の中に、キャンプの１回毎に、１日毎に、１プログラム毎に、そしてこのキャンプに関わってくださった１人１人にそれぞれの思い出があり、それらを全て積み上げた結果が今回の「50周年」であると思います。

重度肢体不自由青少年と親のキャンプ、重度肢体不自由青少年のキャンプ、日本平キャンプ、高木記念山中キャンプへと名称を変え、社会のニーズとともに変化してきたこのキャンプですが、『同じ障がいがある仲間や、キャンプボランティアとの交流を通して、豊かな創造性と友情をはぐくむこと』をねらいとして、日頃家庭ではできない、楽しい体験をふかめていきます。（第50回パンフレットより引用）とあるように、「キャンプの主役は子どもたちであること」は変化することなく継承されています。

比較的小規模で、家庭的な雰囲気をもったこのキャンプが今後も継続でき、子どもたちの体験の場が継続できるように関係団体・関係者の皆さまにお願い申し上げる次第です。

この記念誌をご覧いただいている皆さまには、懐かしさとともに、未来へのご支援ご協力をお願い申し上げます。

平成30年10月

もくじ

はじめに

祝辞

・「高木記念山中キャンプ開催50周年に寄せて」
社会福祉法人 日本肢体不自由児協会　理事長　田中　健次 …… 3

・「高木記念山中キャンプ50周年に寄せて」
社会福祉法人 ＮＨＫ厚生文化事業団　理事長　鈴木　賢一 …… 4

・「光に歩めよ若き友よ、限りなき成長こそ日々の祈りなれ」
高木記念山中キャンプ50周年に寄せて
公益財団法人 東京ＹＭＣＡ　総主事　菅谷　　淳 …… 5

・「日本平・高木記念山中キャンプ50周年記念」
公益財団法人 キリン福祉財団　理事長　三宅　占二 …… 6

思い出

あ行（Ｐ７～）　雨宮飛香／飯島康介／池田郁子／池邊徹平／石川勝喜／石飛優奈／
礒部詩乃／伊多波美奈／伊藤圭子／井上　悠／上原奈奈／漆戸敏夫／
大木光代／大田明未／岡村岳暁／小川　慶／尾木聖二／小椋喜一郎／

か行（Ｐ21～）　亀岡淳一／金子　正／金子マリ／川上千佳／神戸洋介／菊地　謙／
北島多佳子／久米洋子／栗原壯一郎／幸野友美／児玉結花／小林美紀／

さ行（Ｐ27～）　坂田英駿／佐藤智一／柴田知美／柴田優子／島﨑絵里加／

た行（Ｐ28～）　高田奈歩／高津雄大／髙橋真由美／髙橋美樹／滝島太一／田中信之／
谷川琢人／都築尚子／寺山　啓／富澤　燿／

な行（Ｐ32～）　長沼哲也／中山　哲／楢山聡子／西山千香子／野口恵理子／信國桜子／

は行（Ｐ34～）　橋本慶介／原山紀代子／兵藤明香／福島唯夏子／藤井寿子／
藤波千恵子／古谷典子／紅谷　聡／星野明美／

ま行（Ｐ36～）　正木那緒／真砂香織／松尾絵美／松尾隆司／松永尚樹／丸山　勇／
三須美紀／宮田佑紀／森山光良／三木秀之／

や行（Ｐ39～）　山根伸俊・山根　泉／横井剛之／吉澤　豊／吉野純子／

わ行（Ｐ41～）　渡辺一男／渡辺正義／渡辺真理／渡邊茉莉／綿　祐二／

療育キャンプ事業等の変遷から現在 …… 45

キャンプのあゆみ …… 49

編集後記 …… 52

高木記念山中キャンプ開催 50周年に寄せて

社会福祉法人 日本肢体不自由児協会
理事長　田中 健次

高木記念山中キャンプが本年で第50回を迎え、ここにそれを記念しての記念誌が発行されるに当たり、これまでの半世紀の間、この療育キャンプ事業を支えていただいた多くの関係団体並びに関係者に対し、衷心より感謝と御礼を申し上げます。

この高木記念山中キャンプ(旧日本平キャンプ)は、昭和40年に当協会が創設した家庭奉仕員制度のホームヘルパーによる自主的な活動の中で集団生活体験の必要性が唱えられ、昭和44年に東京都秋川において重度肢体不自由児母子キャンプとして始まり、翌年には高木記念日本平ロッジ(静岡県清水市(現静岡市清水区))へと開催場所を移し、その名称も「重度肢体不自由青年と親のキャンプ」、「重度肢体不自由青年のキャンプ」、「日本平キャンプ」と、時代の変遷とともに変化するニーズに対応しつつ名称も変遷し、平成６年からは、東京YMCA山中湖センターに場所を移し、高木憲次博士の名を冠した「高木記念山中キャンプ」として今日に至り、創設後50周年を迎えることができました。

この50年間には多くの肢体不自由児者、ボランティアがこれらキャンプで得た経験とともにその思い出を胸に、それぞれの社会においてご活躍されているものと拝察いたしております。

この療育キャンプ事業がはじまった当初とは肢体不自由児者を取り巻く環境も大きく変貌し、近年では肢体不自由児者が地域で自立した生活を送れる社会環境も整備されて来ていますが、まだ課題も多く、今後ともより良い自立に向けての社会・生活環境の整備が求められています。

当協会では、現在年間４種の療育キャンプ事業を実施いたしておりますが、その中で、18歳未満の児童を対象とする事業が３種あります。当高木記念山中キャンプ事業はこの中の２種の中ですが、３種の中のもう１種は冬に開催される親と子の療育キャンプ事業です。さらに、別の１種は18歳以上の肢体不自由者の療育キャンプ事業です。

これら４種の療育キャンプ事業は、主体となります肢体不自由児及び者とその家族の方々の理解を得てのものですが、これら参加児者のために主に学生生活の中での貴重な期間をこの療育キャンプ事業のために多くの時間を割いて参加されておられるボランティアの皆様なくしては実行は困難な事業です。そのような意味からも毎年度多くのボランティアの皆様に対しまして深甚なる感謝と御礼を申し上げますとともに、今後ともこの事業が続けられますよう後輩諸氏等の参画に向けてご配意を賜りますようお願い申し上げます。

さらには、この療育キャンプ事業を実行面で長く支えてきていただきました社会福祉法人NHK厚生文化事業団（第11回～ 34回は共催／以後は後援・協力団体)、公益財団法人毎日新聞東京社会事業団(後援団体)、公益財団法人東京YMCA（後援団体)並びに公益財団法人キリン福祉財団(協賛団体)には、これまでのご支援・ご協力に心より感謝と御礼を申し上げますとともに、今後とも本事業の推進により一層のご理解とご配意を賜りますようお願い申し上げます。

高木記念山中キャンプ50周年に寄せて

社会福祉法人 ＮＨＫ厚生文化事業団
理事長　鈴木 賢一

「高木記念山中キャンプ」が、回を重ねて50回という節目に達しましたことは、誠に喜ばしくお祝い申し上げます。半世紀にわたってキャンプを続けてこられた関係の皆さまに心から敬意を表します。

日本肢体不自由児協会の礎を築かれた故・高木憲次先生のお名前を冠したこのキャンプは、協会が行っているキャンプの中では比較的小規模で、家庭的な雰囲気が特徴と聞いています。私どもNHK厚生文化事業団が、このキャンプと関わるようになったのは、「重度肢体不自由青少年のキャンプ」という名称で高木記念日本平ロッジを会場としていた昭和54年からです。主催団体に加わって24回、その後、平成15年からは後援や協力という形で応援しています。

協会が実施しているキャンプの一つに「雪と遊ぼう：親と子の療育キャンプ」があります。肢体不自由児に雪遊びをしてもらおうというこの冬のキャンプは、協会とともに毎日新聞東京社会事業団と私どもの３団体が主催しています。これまでに29回を数え、来年は30回目を迎えます。

新潟県のスキー場で冬のキャンプの第１回が行われたのは平成２年ですが、その25年も前に山形県の蔵王スキー場で「肢体不自由児雪上教室」が開かれていました。現在の冬のキャンプを主催する３団体は、その時から主催団体に入っています。２泊３日の雪上教室は、地元の人たちの協力を得ながら20回続きました。

冬のキャンプの前身とも言える雪上教室のきっかけになったのは、昭和39年、東京オリンピックに続いて開かれたパラリンピックでした。パラリンピックの開催にあたり、ＮＨＫ厚生文化事業団は、大会運営委員会の構成団体として協力していました。準備のために海外の身体障害者スポーツを視察した事業団の職員は、各国の肢体不自由者が、冬季でもいきいきとしてスポーツに取り組む姿に感動しました。この報告を受けて検討した結果「肢体不自由児雪上教室」の構想が生まれたそうです。

それから半世紀余りが過ぎ、東京で再びパラリンピックが開かれます。肢体不自由児・者を取り巻く環境はこのところ大きく変わっています。２回目のパラリンピックが開かれることで、障害者のスポーツやキャンプなどに対する理解が一層進むことが期待されます。

このような時に50周年を迎えた「高木記念山中キャンプ」が、次の50年に向けて更なる発展を遂げますよう祈念いたします。

「光に歩めよ若き友よ、限りなき成長こそ日々の祈りなれ」
高木記念山中キャンプ50周年に寄せて

公益財団法人 東京ＹＭＣＡ
総主事　菅谷 淳

高木記念山中キャンプの50周年を心よりお祝い申し上げます。1969年に「重度肢体不自由児母子キャンプ」としてスタートしてから半世紀、大勢のキャンパーに豊かなキャンプ体験を提供してこられたことに心からの敬意を表します。1978年の10回記念キャンプが私たち東京YMCAの山中湖センターを会場に開催され、そして1994年からは毎年このキャンプが山中湖センターで開催されていることは私たちにとっても大きな喜びであります。

東京YMCA山中湖センターは1923年に開設された日本で最も古いキャンプ場です。当時東京YMCA少年事業委員であった小林弥太郎氏が、「キャンプ」を青少年の良き成長の機会ととらえ、現在の山中湖の地を購入し寄贈くださったのが始まりです。この「キャンプ」は「一人ひとりが受入れられ」「仲間と共に」「自然の中で」生活と活動を楽しむ体験です。一見シンプルなこの体験の中に、実に多くの刺激と成長の機会が散りばめられているのです。草創期の高木記念山中キャンプの記録を紐解くと、参加する子どもたちにとってキャンプがそのような機会に成り得ていたことがこう記されています。

…ふれあうことのない仲間との交流、ボランティアの援助を受けながらのいろいろなプログラムにドキドキしながら挑戦する楽しさ。毎日が新鮮なおどろきと自分の可能性を試す貴重な時間、まさにキャンプでしか味わえない醍醐味を充分経験する絶好の機会でありました…

キャンプの後半に少したくましさを纏う子どもたちの表情、きらきらと輝く目、仲間との交わりにはじける笑顔、そんな光景がこの記録から思い浮かびます。これは今のキャンプにも変わらずにある光景ではないでしょうか。50年もの長きにわたってどれだけ多くの子どもたちがこのキャンプでエネルギーを得て育てられてきたか想像に難くありません。

そして、高木記念山中キャンプが果たしてきたもう一つの役割は、若いボランティアたちを育て社会に「共に」の価値を拡げる働きを担ってきたことです。これも今に変わることなく継続されている大切な働きだと思います。

小林弥太郎氏の志は「光に歩めよ若き友よ、限りなき成長こそ日々の祈りなれ」という言葉に残され、今に至るまでYMCAキャンプの願いとして継承されています。高木記念山中キャンプの50年にわたる働きは、まさに若きボランティアやキャンパーの歩みと未来を光輝かせる尊いものであると思います。これから始まる新たな50年、光に歩む子どもたち、そして若者を育てる働きが力強く継承されていきますように願ってやみません。

最後になりましたが、このキャンプの実施に私たちを用いてくださっていることに感謝申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

「日本平・高木記念山中キャンプ50周年記念」

公益財団法人 キリン福祉財団
理事長　三宅 占二

「日本平・高木記念山中キャンプ」が本年で第50回を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

昭和44年に貴団体の家庭奉仕員の自主的活動から「重度肢体不自由児母子キャンプ」としてスタートされ、「重度肢体不自由青年と親のキャンプ」、「重度肢体不自由青年のキャンプ」、「日本平キャンプ」と改称されながら現在の御隆盛を成し遂げられましたことは、正に田中理事長様をはじめとするスタッフの皆様のご尽力の賜物と改めて敬意を表する次第です。

私達公益財団法人キリン福祉財団は、キリンビール株式会社が同社設立75周年および国際障害者年を記念して、障害児・者福祉、高齢者福祉、児童・青少年福祉を通じて、地域社会全体の福祉が向上する諸活動への助成等により、我が国の社会福祉の発展に寄与することを目的として、1981年７月21日に設立されました。

障害を持つ子ども達の健全な育成という皆様との共通の想いのもとで、私達は設立直後の昭和57年度より平成29年度まで36年間にわたり、貴団体の肢体不自由児療育キャンプにかかわるボランティア活動に対して、助成をさせていただいて参りました。貴団体とのイコールパートナーの関係での取り組みは、まさに私達財団の歴史と軌をいつにしているといえましょう。

そのような関係のなかで、本年２月８日の貴団体の設立75周年記念式典では、私達に対して感謝状を賜り、大変光栄に存じますと共に、この場をお借り致しまして謹んで厚く御礼申し上げます。

直近では、私どものスタッフが第49回高木記念山中キャンプ(平成29年８月22日～26日)に参加し、参加者28名、スタッフを合わせると総勢92名の皆様の明るく・元気な活動にふれさせていただきました。

また、子ども達を支える学生ボランティアを育成するために開催されるキャンプ前後の計６回の研修では、貴団体からのインプットの他にも、参加者に楽しい時間を過ごしてもらうにはどうしたら良いか、と思い悩む学生達の熱い想いが溢れ出ている場でもありました。

このように、私達の歴代の財団職員にもキャンプの準備段階から参加する機会を与えていただいたことで、皆が助け合って共同生活を送るという素晴らしい体験をご一緒でき、知見も拡がりましたこと、心より感謝申し上げます。

それらは、高木憲次博士の「たとえ肢体に不自由なところもあるも、次の社会を担って我邦の将来を決しなければならない児童たちに、曇りのない魂と希望をもたせ、その天稟をのばさせなければならない。それには児童を一人格として尊重しながら、先づ不自由な箇処の克服につとめ、その個性と能力とに応じて育成し、以って彼等が将来自主的に社会の一員としての責任を果たすことが出来るように、吾人は全力を傾盡しなければならない。」の療育の理念そのものの体感ではないかと感じております。

これまでの50年の経験を生かされ、貴団体の今後の事業が益々発展され、家族を支援し、社会を啓発し、肢体不自由児が更に恵まれた環境に身を委ねることができるようになりますこと、心より祈念申し上げ、ご挨拶の言葉とさせていただきます。

思い出

雨宮飛香（あめみや あすか）　●スカ　（第25回／C）

キャンプの参加が決まってからは、不安でもあり、楽しみでもあり…。
みんなと過ごした時間は、あっという間だったけど、
たくさんの人達と出会えて、良かった。
キャンプに行けて、良かった。
本当に楽しかった。
ずいぶんと時間は経ったけど懐かしく思っています。
楽しい時間をありがとう。
そして、これからもよろしくね。

飯島康介（いいじま こうすけ）　（第32回／C）

このたびは記念行事のお知らせをいただきまして、ありがとうございます。参加させていただいた時が18年も前になるのですね。その節は大変お世話になりました。いろいろとご配慮していただき本当にありがとうございました。
康介はキャンプのアルバムの写真をよく見返しています。アルバムの余白に得意の絵を描いています。
今回の『ひとこと思い出欄』に絵を載せていただこうと思っていたのですが、「写真と似ている絵だな」と改めて感じ、ぜひ写真とともに見ていただきたいと思い、同封させていただきました。康介にとって楽しい思い出になっているのかな、そうであったら私たちも嬉しいです。
貴重な記念行事に参加させていただき本当にありがとうございます。どうぞ宜しくお願い致します。

池田郁子（いけだ いくこ）　●イクチャン　旧姓：後藤　（第8回／L）

あれから40年！「シルバー」という冠を得る歳になりました。
今も富士の雄姿の下に集える仲間達のキャンプが続いているんですね。
そんなキャンプに参加できたことに、改めて感謝しています。人はささえ合って生きていることを実感した貴重な体験でした。あの体験の種があったからこそ、今の婦人相談

員という職を続けられている様な気がしています。
“人が人を大切にできる社会を目指す”まだまだ続く大きな課題ですね。
キャンプがますます大きく育ち、守られていくことを影ながら応援しております。
キャンプだホイ　キャンプだホイ　キャンプだホイホイホーイ
今でも口ずさんでいます。

池邉徹平(いけべ てっぺい)（第33回／C）

山中キャンプやスキーキャンプでお世話になりました。
自宅に事前にボランティアの学生さんが来てくれたり、病院の先生方がだっこしてスキーをして下さったり、多くの方々のおかげで貴重な体験ができました。
ありがとうございました。

石川勝喜(いしかわ かつよし)（第42回／C）

紅谷様、奈々様、ずっと連絡をいただいており、ありがたいです。多分、スキー合宿の時に、勝喜をボランティアさんが階段で落として、頭にけがをした事が、おたがいの心に残って、今でもお手紙をいただけて幸いです。勝喜は今年、成人となりました!!地域の小・中学校へご存知の様に重度障害者ですが、市の式典で、たくさんの友人から声をかけていただき、介助員の方々や担任の先生方とも会えました。今でも、地域の方々や、ヘルパーさんや、市の議員さんや、新座市の職員の皆様に助けていただいております。

地域の小学校の１年と２年生の父母と先生方とランチ会をアレンジしたのは私です。

障害児・者にとって一番大切なのは地域の人々のご理解と思います。お二人が頑張って下さって、次世代につなげて下さる事はありがたいですね。

石飛優奈(いしとび ゆな)（第37・39・44回／C）

麦茶飲めたね。ミラクルTMC!!

礒部 詩乃(いそべ しの) ●くちこ　旧姓：堀口（第36・37・39・48・49回／L）

高木記念山中キャンプ50周年おめでとうございます。
50回に及ぶキャンプの中で、本当にたくさんの人が関わってこられたことと思います。

その一人一人の「人生」においてかけがえのない思い出が残っていることでしょう。このキャンプを知らない方は「人生」なんて大げさな、なんて思うかもしれません。ですが皆さんならお分かりになると思います。まさに「人生」の中でキラリと輝く経験の一部になっているのです。

私は小学生の時にフレンドシップキャンプにキャンパーとして参加したことが始まりでした。そこから高校3年生まで毎年欠かさず参加しました。子どもの私にとって、山中湖で障害を持つ方やリーダーと過ごす夏の数日間は1年に1度の大イベントだったことを覚えています。そのたった数日間で築かれた経験は、いつまでも忘れたくない「人生」の宝物になったのです。

大学入学後、なんの迷いもなくリーダーデビュー、フレンドシップキャンプ、手足の不自由な子どものキャンプ、スプリングキャンプそして高木記念山中キャンプ。山中湖での子どもたちのかけがえのない笑顔、時には悩んで泣いて、ぶつかり合って築いたリーダー同士の絆。どれもがその頃の私にとっては、「人生」の糧になりました。

私がプログラムディレクターをさせていただいたのは、37回高木記念山中キャンプでした。13年前、若干25歳の私は周りの方に支えられ、まさに体当たりだったのだと思います。今でもよく思い出すことがあります。全体プログラムでゲーム大会を企画した時のこと。子どもたちがどうやったら楽しめるプログラムが出来るのか考えに考え、スタッフはじめドクターまでも巻き込んで協力していただき、まさしくキャンプ全体で楽しむ会を皆で作り上げました。そして、子どもたちの笑顔が溢れた素敵な時間を過ごし、大仕事を終えた私にきっかいが「とてもいいプログラムだった」と褒めてくれたのです。10代の時から見守ってくれていたきっかいに褒められたことは、本当に嬉しかったのを10年以上たった今でも忘れません。当時の写真を改めて眺めてみると、みんなの弾けるような笑顔はどれも生き生きとしています。私にとってこの笑顔たちは青春の一部、大切な「人生」の一部となったのです。

現在39歳。結婚し、長男、次男、三男が生まれ、それはそれは毎日があっという間に過ぎ去っています。主人も含め男子のなんとも不思議な世界観の溢れる日々に、どうしてこうなったのか…なんて思ったりもしながら、気が付けば三男も小学生になり、少しだけ生活の中で余裕も出来るようになりました。キャンプから離れて十数年、キャンプとはかけ離れた生活を過ごしていても、時々思い出すことがあります。キャンパーとして、リーダーとして、スタッフとして関わってきたキャンプでの様々な思い出がふとした瞬間に浮かぶのです。なぜならそれは紛れもなく私の「人生」にとってかけがえのないものだから。もちろん嫌な思い出も、それを含めて全てがなかったら今の私はないのではないかと思うほど、キャンプが私にとって「人生」の大きな存在になったのです。

50回に渡って続けられてきたこのキャンプが、多くの人の「人生」を豊かにしてくれています。今後も高木記念山中キャンプがたくさんの子どもたちにとって「人生」の素晴らしい経験となるよう、またそこに関わるリーダー、スタッフにとって「人生」のかけがえのない存在となるよう願っております。

まだまだ子どもに振り回され、イライラ、カリカリしている私もキャンプのことを思い出して、若かりしあの頃のキラキラした自分にもう一度戻りたいな、なんて思ったりしています。いつかまたキャンプに戻ってきた時に、体が悲鳴を上げないように体を鍛えておきますね…。

伊多波美奈(いたば みな)　●りぼん　(第46～48・50回／L)

苦手なニンジンもみんなと一緒に食べれば美味しく感じる。
山中マジック？キャンプマジック??
ありがとうと笑顔にあふれてるTMCが大好きです♡

伊藤圭子(いとう けいこ)　●いとけー　(第9～12回／C)

いとけーです。
私は中３～高３まで参加していました。
よく考えてみると、高１のキャンプの時は、20周年記念で山中湖に行きましたよ？
…ってことで、私のキャンプの思い出は、とにかくよく泣いていました。
ホームシックだったらかわいいけど…肝試しのオバケが恐いと言っては泣き、大好きなリーダーのお兄さんやお姉さんを見ては「大好きだからここにいて～」と言っては泣き、最終日「別れたくなーい」と言っては泣き…涙と声が枯れるんじゃないかと。（イヤ！涙は枯れたかもね…最近は泣かないもんね！　あ！年のせいかも）
キャンプはそんな私の人生の成長剤となって、リーダーさんとのやりとりは、今、日々の生活のヘルパーさんたちとの会話や介助指示、そして楽しく前向きになれることの役に立っています。
私を大きくしてくれたSHCに感謝！

井上　悠(いのうえ ゆう)　●ゆう　(第36・39・40・42・43回／C)

夏のキャンプ本当にありがとうございました。

人との関わりが苦手な娘でした。将来、親以外の人とも円滑に関係が作れる様になってほしい。と願い、小学５年の時に初参加して、７年参加させていただき、中学２年の時にはキャンプを楽しみにして「キャンプは～？」と催促するようになりました。今でも「キャンパーは？思い出会は？いつ？」ときいて来ます。現在は自分から「こんにちはー、ありがとうございます。」と積極的に関わりをもてるようになりました。キャンプでの経験のお陰です。
これからも繋がっていられると嬉しいです。大思い出会楽しみにしています。

上原奈奈（うえはら なな）　●ななちん　（第13～31・35～50回／L）

今年、「第50回高木記念山中キャンプ」を行うにあたり、リーダーへのオリエンテーションで用いた話です。

『「3つのVをもちなさい」日野原重明先生が常々口にされていた言葉です。

第一のVはビジョン、将来を見すえた大きな展望を指します。

第二のVはベンチャー（冒険心・開拓心）、未来を開く勇気ある行動（チャレンジ）がなければビジョンは完成されないという意味です。

そして、第三のVはビクトリー（勝利）、ビジョンを描き、勇気をもって行動すれば、いつか「夢」を手につかむことができるということです。

先生は医師としてそして教育者としてさまざまな仕事に携わってこられましたが、いつもこの3つのVとともにあったと語られ、100歳になった時も、第一のVを目標に揚げてスタートラインに立たれていたそうです。』

参加するリーダーひとりひとりが、このキャンプへ参加するにあたり、何らかのビジョンをもって、チャレンジをし、何かをつかんで欲しいとの願いをこめました。この1回のキャンプでひとりひとりがつかんだものは、どんな小さなものでも、これからの人生の中の1つの礎になることと思います。

さて、我らが「高木記念山中キャンプ」は、療育事業の創始者である故高木憲次先生の名前をいただいてます。

高木先生の掲げられた療育の理念は「彼等が将来自主的に社会の一員として責任を果たすことが出来るように、吾人は全力を傾儘しなければならない」とし、手足の不自由な児童に自活の道を願い、それには治療と教育と授産の三位一体のものが必要であり、それを実現するために、大正14年（1925年）肢節不完児福利会が設立され、いろいろな経緯のもと昭和17年（1942年）整肢療護園がつくられました。療育システムを社会の中に作って、社会の中に根付かせていきました。今では社会で生活をするのはごく当然のこ

とですが、福祉サービスの拡充をただ単に医療だけではなく、社会の中でどの様に生きていくのか、共生社会をつくることを望まれていたのかと思います。(多分･･･現在進行形)ここにも3つのＶが活かされています。

また、高木先生は生前、富士山をこよなく愛され、富士山の見える景勝の地に肢体不自由児の保養所が設置されることを念願されていました。

昭和40年(1965年)、高木先生所有地にかかわる替地として、静岡県が肢体不自由児キャンプハウス建設のため無償譲渡した日本平の土地に、児童厚生施設・ユースホステルとして高木記念日本平ロッジを設けました。

そのころ(？)、昭和44年(1969年)に在宅重度肢体不自由児童の家庭を訪問している家庭奉仕員(ホームヘルパー)の自主的な活動の中から、集団生活の体験の必要性が唱えられ、都下、秋川にて参加児童9名の小規模なグループで行ったものがこのキャンプの始まりですが、昭和45年 (1970年) の第2回目からは、キャンプ場を高木記念日本平ロッジとし、まさしく富士山の絶景を仰ぎ見ながら、三保の松原や用宗海岸での海水浴をメインプログラムとする、プログラム体験を中心としてキャンプは運営されてきました。この間、応募者の増大からABCの3セッションを増設するなどして、その時々の時代のニーズに合わせてキャンプの規模・組織そのものを変化対応させてきました。ここにも3つのＶが活かされています。

そして平成6年(1994年)第26回より、山梨県山中湖にて開催し、キャンプの名称を「高木記念山中キャンプ」としました。山中湖と富士山という雄大な自然は、キャンプに参加するひとりひとりの心を自由に解き放ち、開放感を与えてくれます。また、従前の小規模で家族的なキャンプの雰囲気はそのまま、願いとして継続されています。

キャンプ地として与えられている山中湖センターは、日本で最初の青少年のための組織キャンプ場として開設された歴史あるキャンプ場であるとともに、山中湖、富士山を目の前にそなえ、平坦でしかも障がい児･者にも使いやすく整備されたキャンプ場です。

1923年(大正12年)小林弥太郎氏がこの地を購入し、大型テント2張りを用いて青年8名のキャンプを行ったのが始まりです。「全人的教育」が小林氏の持つキャンプの思想で、「Learn　by　doing」(なすことによって学ぶ) という教育理論に基づく日本では先駆的なものでした。また、第二次大戦後、GHQの「農地解放」という占領政策から原直治郎氏がその地を守り抜き、現在へと歴史を刻んできています。山中湖センターの大きな特徴は「多くの人たちがオーナーシップを感じているキャンプである」と言え、長い歴史の中で多くのキャンパー･リーダーがこの地で育てられ、特別な愛着を感じて来ています。この思いが今なおセンターを支える力となり、活気を与え続け、訪れる多くのキャンパーOB・リーダー OB、そのひとりひとりがこのセンターにオーナーシップを感じ、我が

家のように愛しています。ここにも3つのＶが活かされています。

さてさて、我らが「高木記念山中キャンプ」。第50回を迎えました。

ボランティアの自主的な活動の中から創出されたこのキャンプは、4泊5日の楽しい生活を通して、「同じ障がいがある子どもたちが、仲間やボランティアとの比較的少人数で家庭的な生活経験を通して、豊かな友情と創造性を育むこと」をねらいとし、ボランティアリーダーの自発的な活動を大事なものとして運営されてきました。リーダーの自発性が、ひいてはキャンパーたちのもつ無限の可能性を誘発し引き出すものとして、日頃家庭ではできないさまざまなプログラムにチャレンジし、楽しい体験をふかめています。

高木先生が与えてくださった日本平ロッジ（肢体不自由児キャンプハウス）で回を重ね、山中湖センターへ移り、美しい自然の下で「願い・特徴」を実現していくためには、リーダー自身に、考えること、より良いものを作ることが求められてきました。キャンパーたちや与えられた状況と素直に対面し、一緒につくっていく、ことばを変えれば、リーダーがいつも新鮮であり成長することが必要とされていたのです。初回のリーダーたちが願った「自分たちの手で作り上げる」自主性を、リーダー・スタッフのひとりひとりが心に留め、子どもたちと共に、大きな笑顔をたくさんつくって来ました。ここにも3つのVが活かされています。

さぁ。来期は51歳を迎える「高木記念山中キャンプ」。

このキャンプが半世紀を超え継続していくためには、新たにどの様な3つのVを持つのでしょうか。

明日からは第一のVを目標に揚げてスタートラインに立つ準備が始まりますね。

そして、「高木記念山中キャンプ」にオーナーシップを感じる、キャンパー・リーダー・OB・OGはどれだけいるのでしょうか。キャンプへ愛着を感じ、この思いがキャンプを支える力となり、活気を与え続け、我が家のように愛している。

うん？　知っているよん！　たくさん居るって！
そ・れ・は…私と……あなた‼
そ・し・て…君と…君と…君と…

漆戸敏夫（うるしど としお）　●カブレ　（第9回／L）

50周年おめでとうございます。22回キャンプに参加させていただいてから早40年。
文集をひっぱり出してきて、読み返しながら、書いています。
当時大学４年生だった私は、長野での37年の教員生活にひと区切りをつけ、62歳となり

ました。ふり返るとまるで夢のような６日間のキャンプ、家庭訪問等も含めて、あの出会いや、尊い経験すべてが、私の人生の大事なコア(核)となりました。
あの時の我班のメンバー５人のうち１人とは、今でも毎年の年賀状のやりとりが続いています。他の４人はどうしているかな。会いたいなとなつかしい気持ちが胸いっぱいに広がります。リーダーやスタッフの方々にも再会したい。

大木光代(おおき みつよ)　●みっちゃん　(第32・34回／C)

50周年記念行事おめでとうございます。
今回は参加できませんが、これからも重度肢体不自由児のキャンプが続いて行きますよう、願っています。
16年前の中学２年で参加させて頂きました。リーダーさんたちのキャンプネームが印象的だったのを思い出します。
「こっぺ」「おさる」…お元気でご活躍のことと‼

大田明未(おおた あみ)　(第49・50回／C)

みんなでバーベキューしたのがたのしかった
リーダーさんだいすき

岡村岳暁(おかむら たかあき)　●オカムー　(第43・44回／C)

みんなと一緒に雪遊びをしたこととくさルームでくさと電車話をしたことが忘れられません。
またみんなでキャンプができたらと思っています。

小川　慶(おがわ けい)　(第30回／C)

小学生の時に参加させて頂き今や29才となりました。
オルゴールの森で付き添いのお医者様との思い出の写真、今でも飾ってあります。

尾木聖二(おぎ せいじ)　●はしりゅう　旧姓：奥村　（第28～31回／L）

♫あおい空　しろい雲　みどりの　山なみ～
みんなでうたった歌、山中湖でのボート、キャンパーとの食事やお風呂、キャンプファイヤー、そして富士山。全てが、ついこの前のことのように思い出されます。高木記念山中キャンプは、私にとっての青春の１ページ、そして原点でもあります。滋賀で、特別支援学校の教員として働いています。みんなとの時間は、20年以上たった今も、私の中で輝き続けています。

小椋喜一郎(おぐら きいちろう)　●オヤカタ　（第２回～50回／L）

キャンプの過去をたどる旅

2018年8月、無事第50回のキャンプも終了した。40周年からもう10年が経過したという感慨もよぎった。そして50周年の催しと相成った。個々のキャンプそのものの歴史は、40周年の記念誌に語り尽くした気もしたのでここではその周縁にあることどもを回想としてたどってみたいと思う。

１　手探りの世界―クリスマス会と家庭奉仕員制度

高木記念キャンプの原点は1965年から始まった家庭奉仕員制度である。私は、大学1年の時、新聞の片隅に載ったボランティア募集によって日本肢体不自由児協会（以下協会）に出入りし始めた。月1度の会合があり、当初は何も知識のないままそこで出るお寿司に釣られたような感じであった。その後家庭に派遣され、F君の家を毎週訪問した。医師の家庭であり、学習を中心と要望され、彼を外に連れ出すこともできない閉鎖された訪問の在り方などに疲れて半年余りで挫折してしまった。F君にはほんとうに申し訳ないことをしたと今でも悔やんでいる。1950・60年代は、障碍児者への差別偏見も強く、極端な表現をすれば世間の目からは隠す家庭が多く、1979年の養護学校義務化まで、重度の子ども達は就学猶予の名の下に日常を家で過ごさざるを得なかった。Yさんなどは精神科病院に入所を強制されたとよく語っていた。このような閉鎖的な状況の打開のため何とか外に出る機会を持とうということで、クリスマス会が始まった。ずっと後にKやTの「親方とゆかいな仲間達」という人形劇の一座が生まれたのもクリスマス会がきっかけだった。また、先行する兄貴分でやや軽度の子どもたち対象の「手足の不自由な子どものキャンプ」（CDC）では、重症児は参加する体制もなく、何とか重度の子ども達中心としたキャンプをという声とともに1969年、秋川渓谷で始まった。第2回か

ら第25回（第10回は山中湖）は静岡県の高木記念日本平ロッジ、第26回から山梨県の東京YMCA山中湖センターで開催され、今日に至るのである。

2　どこにたどりつけるのか―自立の困難な日々

当時協会は、池袋にあり、駅前では、兵隊帽に白衣で松葉杖の戦争での怪我などによる傷痍軍人の人たちが、アコーディオンをならし、献金を募っている光景があたりまえのように街にとけ込んでいた。1949年の身体障害者福祉法は、傷痍軍人を対象としたり、中途障碍の軽度の人たちの職業的自立を主な施策とし、社会復帰が困難な先天性の障碍にはあまり配慮がない観があった。どのような障碍児者施策が望ましいのか手探りの状況であった。ある時、キャンプで知り合ったNさんの家を訪れたとき、「今、タバコの販売の店の申請をしている」とうれしそうに話してくれた。当時（今も）身体障害者福祉法の第24条には、「製造たばこの小売販売業の許可」として、身体障害者から小売販売業の許可を申請した場合、優先的に許可がなされる条項があった。Nさんは重度ではあったが日常会話は問題なく金銭のやりとりも普通にでき、多分許可は下りるであろうと私も楽観視していた。少し経ってNさん家を訪れると、同家の目の前にタバコ屋が新しくできていた。まさかNさんの店かと疑問に思いつつ聞くと、全く関係のないかつ障碍者の家でもないということであった。同時期に申請したのに「何で」「法はどうなったの」と二人で嘆いてもどうにもならなかった。法は空文であり、障碍者の自立など絵空事でもあったのである。1977年には、路線バスの車いす乗車拒否が相次ぎ「青い芝の会」が「バス闘争（川崎バス闘争）」を展開した時代でもった。

3　種を蒔く人―母達の活躍

キャンプの当初は、母親達も参加した。もちろん、子ども達とは別プログラムで、閉じこもりがちな母親達の交流の場であった。子ども達以上に外に出る機会もなく、日常的には家庭で「親子べったり」の日々があり、そのため「母子分離」の場としてキャンプが活用された。また、制度の不備から、意図的に離婚し母子家庭となる状況もあった。その後の印象的分析ではあるが、近年まで一人親家庭の多さは否めない。法ではリハビリテーションが更生と訳されたが、PT・OTは少なく、当時は母親がリハビリの教師でもあった。病院に通う時背中の子どもに言葉の発音を繰り返したり、排せつが自立できるようにしたと母親達から聞いた。昨今、キャンプでは大量の紙オムツに驚くことがあるが、キャンプの初期では、布オムツの時代ではあったが、重度であってもオムツのイメージはなかった。これも排せつの自立訓練が母親によってなされていたことが大きい。また、キャンプ当初は医療を離れた場との目的のため、医療スタッフもいなかった。病人

が出れば静岡市内の病院に夜中でも走った。今は医師と看護師が配置され安心な状況ではあるが、それでも医療的ケア児の受け皿は十分とはいえないジレンマもある。一方で、朝子どもをキャンプに送り出すと会社に向かう母親も居る時代となった。レスパイト(休息)サービスがキャンプの役割となるなど時代も変わった。

当時は社会福祉施設の少なさから自分達で施設を立ち上げる親たちもいた。早い時期にNさんは、I区に施設を立ち上げた。後に区立となって、私が実習巡回したときは、その影響力は形すらなく残念な思いがした。思い起こすのは、日航機が群馬の山に墜落した夏の日のことである。その日私は、M市にあるFさんの母親によって創られた小さな施設を訪れた。施設といってもアパートの2室を借りてのスタートであった。その後、M市と交渉し土地の譲渡を受けたが、自己資金で苦労された。やっと社会福祉法人となり、今日では多くの施設を抱えるまでになっている。今も「Hたより」が送られてくるが草創期の苦労を知る職員は少なくなっている。時の流れとはいえ、アパートの時代を知るものには寂しい気もするが。こうした親達だけでなくUさんのようにリーダーとして鹿児島からキャンプに参加し、その後障碍者関連の施設の理事長として活躍する人物もいる。そこには多くのキャンプの参加者が施設長などとして活躍している。キャンプの精神も受け継がれていると聞く。(私も念願の社会福祉法人を立ち上げたが現在は高齢者中心であり、将来的には障碍の分野にもと願ってはいるが、岐阜の田舎では人材の確保は厳しい。)

4　信頼関係が生まれ―キャンプ後の交流史

キャンプ外の交流として上野動物園や読売ランドなどの遊園地を訪れたり、横浜の港の見える街などといろんな所を訪れた。キャンプが終わってもそのままさようならではなく、皆、誰彼との交流があった。アルバイト先の近くのHさんの家でもお父さんとよく飲んだ。ある時お父さんが「私は競馬の馬券を買う時一番弱そうな馬に目を付ける」とおっしゃった。その言葉は今も忘れない。また、最近は年賀状の交換数も少なくなったが、最初の頃のキャンプから参加したTさんとのやりとりはまだ続く。キャンプ参加当時は彼女は小学生、その後、Tさんは日本では珍しく自由なH園に入所したが、それでも束縛を感じたのかそこから出て、今はH市で自立の生活を送っている。たとえ介助は受けても自分で自分の生活を送るのはなにものにも代えがたいものであろう。そうした一人にSさんもいる。彼はパソコンを駆使して多くの人と交流している。ITは、ハンディのある人の生活を変えたと言ってよいであろう。その他Iさんなど何人も自立生活を送っているが、かってのように大学の前でビラを配りヘルパーを募る苦労は少なくなっているとは聞くがそれでも一人暮らしは大変であろう。

5　大河となって導く―キャンプからキャンプが

今から考えると、夏はキャンプ漬けで、多い夏は4つか5つのキャンプに参加した。どういういきさつか忘れたが「蟻の街保育園」の子ども達のキャンプにも顔を出したのも記憶に残る（おひげのお兄さんと呼ばれていた）。ここでは日本平から始まったキャンプが様々な形で発展していったことを少し記録に残しておきたい。1980年に終わってしまったが若者の「日本平ロッジの集い」（ユースキャンプ・モビリティキャンプ）、今も続く春の「スプリングキャンプ」など実に多くのキャンプ（40回記念誌でOさんの記録した小さなキャンプもあった）が開催され、CDCなどとともに障碍児・者のキャンプのパイオニア的役割を果たしていった。

とりわけ福島県でのキャンプは思い出深い。秋元湖という広い湖のキャンプサイトで、周りにはなにもない。お風呂も車で麓まで降りて入りに行った。朝から食事作りで一日中それに追われた。キャンプファイアは、丸太を組んだ巨大なもので、豪華の一言に尽きた。日がな一日湖でボートを漕ぐことも許されたが、どういうわけか魚を釣ろうとしても全く釣れなかった。ある夜、先に寝た者がキャビンの中から鍵をかけてしまったため、私とHさんは車の中で一夜を過ごしたが夏でも夜は寒く全く眠れなかった。ある年には、Mさんをトイレ介助したリーダー（どうやら酒が入っていた。地元の酒がとても美味しかった）がキャビン外に置き去りにした事件があった。折しも朝方雨も降り大変な状況であったが、Mさんは文句の一言もなく外にいた（雨に濡れ寒かったのでは）。後、彼は作家として名をなす（「お酒はストローで」の言葉は有名）。その人格形成がキャンプであっただろうか（ここで唐突だがスプリングキャンプの第一回は私が企画し運営したことは忘れ去られているかな）。

6　汲めどもつきぬ泉のように―参加者群像

述べ人数にすれば何百人どころか何千の人がキャンプに参加した。時々に増減はあるが、人材はつきることがない。ある人にとっては数ある人生の通過の一時点の思い出、またある人にとっては人生を変えるほどの出来事であったかもしれない。多数のカップルも生まれた。協会のKさんの結婚式出席記録はすざましい回数であった。現在では父親の後を継いでの子の参加もある。ある時Bさんの息子と話した。父のキャンプの姿はあまり知らないので、もっと語ってあげる必要があると感じたこともあった。第50回では、幼児3人も参加し、皆のアイドルであった。さて、今も参加しているKさん（私の次に参加回数は多い）は、最初体育学部の学生であったがキャンプに参加したが為に福祉学部に入り直し、卒業後は都の施設に勤め、夏休みは家族サービスよりキャンプを優先していた。また、最近は、大学に看護学部やリハビリテーション学部が多くなり、福祉

学部の学生より参加数が多いイメージがある。しかし、当初は、リハビリテーションの養成施設は、いわゆる「国リハ」とか「府中リハ」など少なかった。キャンプに参加後「国リハ」の言語聴覚士養成コースに入学した人も何人もいた（当時は公的資格で、言語聴覚士が国家資格となったのは1997年である）。最初の頃のリハの学生は、「大学になることが悲願です」などとキャンプの夜の間論を張っていた。ただ、当初は、リハの教員も少なく英語の講義が行われていた。ある時、国際会議にOTのOさんと参加したことがあった。私はイヤホーンの通訳で聞いていたが、Oさんは途中からイヤホーンを外してしまった。通訳の訳が悪かったのもあろうが、リハの学生の英語の実力を思い知った一幕でもあった（例えば「府中リハ」が大学になるのは1998年で30年余の時が必要であった。また協会の中央療育相談所の所長は、府中リハの院長G先生の兼任であった。G先生は、当時のキャンプ参加者などを長年追跡されていた。ある時私に、20代の出産と30代の出産では障碍のある子の生まれてくる確率に有意な差があることを示してくださったことがある。しかし、今では30代での初産は普通な時代にもなっているが）もちろん、福祉の世界だけが全てではない。医師として参加し医療でキャンプの精神を発揮している人もいれば、福祉とは無縁の国家公務員の世界で働きつつもキャンプを原点として施策に反映したZさん、トップの成績で合格しながら福祉職を希望したDさんのような人も居た（今は大学の教員）。また、JICAの海外青年協力隊員として海外で活躍した人も多い。ある年に数えたら7人もの人が様々な分野で海外に派遣されていた。協会の「WE NEED　YOU」でアフリカの体験の連載記事を楽しみにしたときやTさんからメキシコの便りをもらって驚いた時もあった。またJICAの宣伝パンフにOTとして写真が載った女性もいた。なかには志し半ばで病気になり帰国した人もいたが、後年国際福祉の大学院を担当し海外で活躍した人々の論文を読んだ時、その大変さ過酷さを知り、私にはとうていできないと悟った。そのほかYさんのようにPTとして名をなし、今は大学教員となっているなど、福祉や医療の分野で教員の世界に飛び込んだ人も多い。多くの人の人生を変えたと述べたが、かく言う私もその一人かもしれない。後年「歴史の中で障碍のある人はどのように生きたのか」という懐疑にとらわれ歴史学を学び直した。そして社会福祉の歴史を専門とし教員の世界を歩んだがそれはキャンプの賜物である。半世紀を経て、小さな新聞記事がまさか自分の一生の行く手を決める出会いとなるとは想像もできなかった。以来、相変わらず協会とは縁がある（私に年をとっても役割を与えてくださっていることに感謝）。これは私だけではない。今も多くの人々が様々な形で繋がっている。キャンプの大きな無形の財産でもある。

7　木槿の花が咲く―今年もペルセウス座流星群がやってきた

さて、半世紀ともなると様々な思いが胸に去来する。いっぱい思い出はあり、語ることはつきない。とりわけ、谷村新司らが野外コンサートの合間にロッジに来訪、そのおまけに焼津の温泉に泊まったこと、雨続きの日々に映画の制作が行われ、当時流行歌の一節「あめあめふれふれもっとふれ」がテーマ曲となりまだ耳の底に蘇る（そういえばキャンプが終わってもキャンプソングがいつも口をついて出てくるのは私だけだろうか）。ABC三セッションの強行軍、6泊7日の長いキャンプなどなど思いはつきない。なかでも第12回の時のペルセウス座流星群が雨霰のごとくに降ってきた一夜のすばらしさは今も忘れられない。2018年8月もよく見える年との報道ではあったが、それほどでもなかった（でも、毎年キャンプの頃に流星がやってくるのとぶつかるのは別の楽しみでもある）。

近年は日本平を知るリーダーも少なくなり（例えば、第50回の参加者（協会職員も含め）の日本平参加経験は5人）、日本平25年・山中25年と世代も二分された観がある。

2008年9月第40回記念で、日本平を訪れ、竹林が鬱蒼と茂り、巨木や雑木が生い茂りわずか15年で緑の砂漠と化した日本平ロッジの姿は衝撃的であった。ピロティから見えた美保の松原越しの富士山も見ることはかなわない。キャンプで最も記憶に残る作業であった遊歩道はわずかに見える程度であった。生コン車からでるコンクリートを必死の思いで敷きつめ完成させた道はロッジの象徴的な存在であり、若さ故の出来事であったが、思い出の彼方に消えた。そして自然のすごさと歴史の流れをまざまざと感じさせられた。それでも第40回記念に植物に未来を託し、記念樹に「木槿（むくげ）」と「夏椿」を山中湖のキャンプサイトに植えた。木にまつわる話といえば、このキャンプを様々な形で企画・指導してきたKを思い起こす。彼が記念に焼き板を皆に作ったことやアメリカ土産のシルベェスタインの「大きな木」の本、そしてキャンプでのその寸劇のシーン、さらに私の好きな金子みすゞさんの「木」の詩の一節も（40周年の記念誌にも引用したがもう一度）

「お花が散って　実が熟れて　その実が落ちて　葉が落ちて　それから芽が出て　花が咲く　さうして何べん　まはつたら　この木は御用が　すむかしら」

キャンプは半世紀の間「大きな木」の切り株として休息の場であり、心安らぐ存在であり、目立たないけれど日本の社会福祉の歴史にしっかりした役割を担ってきた。2018年8月の第50回キャンプ、その初日・二日目と木槿と夏椿の様子を見に行ったが花は咲いている様子がない。今年も花にお目にかかれないかとあきらめていたが、三日目、念の

ためと確認したらなんと一番てっぺんに木槿の花が一輪咲いているではないか、とても大きな一輪で感動した。そして翌日は二輪、最終日は五輪と綺麗な花を咲かせてくれた。夏椿ももう少し経てば花開くようにあちこちに花のつぼみが付いていた。山中湖サイトの名物柳の木も青々と葉が茂り風に揺れていた。年々歳々人は変われど、キャンプでの交流はキャンプの形をとるだけでなく、未来に向かって継がれていく。もう半世紀、いやまだ半世紀、まだまだ「御用」ある存在として咲き続けることを願って。

亀岡淳一（かめおか じゅんいち）　●カメ　（第7～48・50回／L）

海も人も大昔の記憶

キャンプ50回目の夏は異常な気象が続き、台風が東から西に進むという観測史上初めての出来事が起こりました。その台風12号の中継で用宗海岸が映りました。台風のたびに用宗海岸も中継地として映っていましたが、いつも用宗漁港からの映像でした。今回は本来の海岸線が映されていたのです。二列の松林、首が痛くなる程の高い防波堤、長～い砂浜が映っていました。荒波が打ち寄せていましたが、あの頃と変わらない景色が続いていました。「日本平と言えば海水浴」と言われるほど、一時期海水浴が定番になっていました。初期の頃の清水港の玉石の浜も動きずらかったけれど、用宗の砂浜もけっこうキツイものがありましたね。先発隊での荷物の運搬、砂に沈む車イスでの移動には泣きましたね。まだ体力のある2日目に実施していましたが、帰ってからのシート類の洗浄やらを終える頃には夕食時間近くになりましたが、気合いを入れ直してからでないと、ロッジの下から階段を上がれないほど、ヘトヘトになったのを思い出します。それ以外にも色々なハプニングがありましたね。迎えのバスが普通の路線バスだったり、海岸に到着したら遊泳禁止で、ただ見ているだけだったり、帰り際に夕立にあったりと、話題がつきません。その中で申し訳なかった思い出は、「つくし号」が寄贈されてからは、海水浴はユニットプログラムとして実施されるようになりました。当然3日間にわたるプログラムになり、PSやPLを振り分けましたが、ある年の先発隊のドライバーは免許保持者の吉沢タカ君しか頼めず、3日間毎日海に行ってもらった事です。海から帰ってくる彼を迎えに行くと、顔つきが日に日に変わってきて、笑顔や口数がなくなってくるのです。よほどの苦行（？）だったんだろうと、今でも忘れられない申し訳ない思い出です。

まぁ色々苦労はありましたが、お日様と海と砂浜があるだけでみんなの気持ちがうれしくなりましたね。大昔海から地上に上がってきて人間になったと言う説があります。その説によると、人間のDNAのどこかに海にいた頃の記憶があって、海を見るだけで懐かしくなるのだ、と言う事だそうです。真相はわかりませんが、確かに海を見るだけ

でうれしくなるのは納得できます。「カメは何故長く参加しているの？」と聞かれた事がありました。その時は偶然説を話しましたが、もしかしたら人が人と関わり合いたいのも、大昔みんなで狩りをしないと生きていけなかった記憶がDNAにあって、キャンプに毎回参加するのも、そのDNAのせいではと思うようになりました。海も人も大昔の記憶に由来しているのだから、41回も参加してきたのも仕方がないと、自分で自分を納得させています。

金子　正（かねこ ただし）　●ぬか　（第26～36・38・39回／L）

高木記念山中キャンプ50周年まことにおめでとうございます。50年という大きな節目を迎えられたこと心よりお祝い申し上げます。高木記念(山中)キャンプを作りあげた諸先輩方、それを継続してきた数多くの学生ボランティア、ボランティアスタッフの皆さま、キャンプに参加してくれた子ども達がいて、このように50周年を迎えられた喜びはひとしおです。

当時を振り返ると約3か月に亘る週1回のリーダートレーニング。プログラムの企画や準備を経て迎えたキャンプ本番。リーダー時代もスタッフ時代（AUD、UD、PD、CH)、たくさんふざけて、いたずらをして、時にはやりすぎて怒られたことを懐かしく思います。当時は、ただひたすら真っ直ぐにキャンプに取り組み、時には悔しくて涙を流したり、髪の毛を剃りスキンヘッドにしたり、みんなが笑顔で楽しむことだけに没頭していたように思います。それができたのも陰で支え、たくさんフォローしてくださった方々がいたからだと思います。改めてこの場を借りて感謝申し上げます。

キャンプでの出会いで絆が生まれ、その絆はなかなか会うことができない今でも当時と変わらず心に大切に持っています。山中湖に響く笑い声や笑顔の裏には、キャンプ中に体調を崩すキャンパーやうまくいかないで悩むリーダーがいたりもしましたが、少しでもひと夏の楽しい思い出をみんなで作っていきたいとの思いで、みんなが一つのチームとして、仲間として支え助け合いながらキャンプ期間を過ごしていたように思います。

私が携わらせていただいたのは日本平から山中湖へと移してからの約10年間ではありますが、高木記念山中キャンプへの参加がきっかけで今の仕事に就き、妻に出会い家庭を築くことができました。今の生活は高木記念山中キャンプがベースとなっているといっても過言ではありません。仲間の大切さを知り、共に過ごす時間の喜びを学び、何よりみんなを笑顔にすることの素晴らしさを教えてくれたキャンプは私にとって、とても大事で大切な場所であることは変わりません。

結びにあたり、時代背景も変化してボランティアの確保や運営等様々な困難さもある

と耳にしておりますが、いつまでも変わらず、みんながいつでも帰ってこられる高木記念山中キャンプであり続けて60年、70年…100年と続きますように祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

金子マリ(かねこ まり)　●わっしょい　旧姓：鷲尾　(第18・19・21・22・24・25回／L)

日本平・高木記念山中キャンプ、50周年おめでとうございます。50年ってすごいですね。私が参加させていただいたのは、およそ30年前の数年ですが、とても貴重な体験で、あんなに笑ってあんなに悩んだことは他にはない濃い時間でした。キャンプで一番に思い出すのは“キャンプだホイ”を皆で歌って踊って、グチャグチャに動いて暑くて、そして皆笑顔という場面です。思い出すとちょっとニヤケます。少し淋しい時、落ちこんだ時に口ずさむのは“キャンパーの夢”です。なぜだか慰められ、「私もだよー」と心の中でつぶやきます。これからも私の力になってくれそうです。
今後も長く長くキャンプが続きますように願っています。

川上千佳(かわかみ ちか)　●マーチ　(第49回／L)

初めてキャンプに参加させて頂いたのは、第49回の時でした。キャンプが終わって、およそ１年が経とうとしている今でも、キャンプでの写真を見かえし、余韻に浸ってます。一緒にごはんを食べたこと、一緒にお風呂に入ったこと、花火をしたこと、星空レストラン、楽しい思い出がいっぱいです。
みんなに出会えて本当に幸せです。沢山の幸せ、笑顔をありがとう(^-^)

神戸洋介(かんべ ようすけ)　●よっぴー　(第39回／C)

富士山がとてもきれいでした。

菊地　謙(きくち けん)　●リンク　(第47・49・50回／L)

『これまでとこれから』

今年で50回を迎える、高木記念山中キャンプ。半世紀も続いたこのキャンプのプログラムディレクターを務めさせていただけること、この場を借りて感謝を申し上げたいと思います。

これまでのキャンプの記録や、経緯を知っていくと、その歴史の長さに感動させられます。そんな歴史あるキャンプのプログラムディレクターの方々と、自分が肩を並べるには大変痴がましいと思うばかりですが、なってしまったものはしょうがない。僕がプログラムディレクターになってもいいと言ったスタッフの方々にも責任はあるでしょう(笑)。

少しばかり、自分の思い出話をさせてください。僕が初めてキャンプに参加したのは、大学1年生の夏。そこから冬、春、夏と様々なキャンプに参加させていただき、5年間で10回参加してきました。自分の大学生活の中で、キャンプは当たり前の存在。“ボランティア”という言葉は自分の中でいつの間にか消えてしまいました。むしろ、少しずつ経験リーダーとして、責任を感じていました。これまでのキャンプの歴史の中では全然短い5年間ですが、自分にとっては大学生活の大半を費やしたとても貴重な経験でした。そして、ふと思うことがあります。どうしてここまで自分がのめり込んだのか。キャンプに参加した最初の頃は楽しかったですが、ただ時が流れて気づけば終わってしまったという印象でした。2年生の夏、その時ちょうど自分の中でも大きな出来事が重なりました。幼い頃から続けていたサッカーを、身体の故障のためやめなければいけない現実が突きつけられました。サッカーの予定で埋まるはずだった夏休み。その時、去年の夏を思い出しました。

『あ、キャンプ。』

そう思い立ってから、夏になるとキャンプというイメージが常にありました。キャンプの中でキャンパーと行ったプログラムは、成功したものも失敗したもの(2年生の夏にやったピザ作りは釜から作ったけど、全然焼けなくて最後は食堂で焼いてもらった記憶が…笑）もありましたが、結果としてはどうであれ最終的にはどんなふうに過ごしても“楽しかった”。その一言に尽きます。思い出はプログラムだけでなく、キャンパーとトイレの中で話した男同士の恋話や、部屋での異臭事件だとか、4日目の空いた時間に自然とみんなが集まって歌ったキャンプソングなど、生活の中での面白さもたくさんありました。普段の家庭生活では、楽しいと思いにくいことでも、キャンプのなかでは全てが楽しさに変えられる魔法がかかってしまう気がします。

そんな人と人の間で生まれる“暖かさ”を感じることができるキャンプが、僕は心の底から大好きです。これからの高木記念山中キャンプを作っていく世代を代表して、これまで参加していただいたキャンパー、リーダー、支えてくれるスタッフ、そして見守ってくれているキャンプ のOB・OGの方々と山中湖キャンプサイトに、50年もの間続いてきたことに感謝を申し上げたいと思います。そして、これからも高木記念山中キャンプが多くの人の“人生の交差点”となるように、微力ながらも全力でお助けしていきたい

と思います！

北島多佳子（きたじま たかこ）（第13回／C）

私が府中養護学校に通っていたころにキャンプに参加しました。何年か前にこの様な集まりのお知らせをもらった時は参加できず残念でした。今回は参加したいと思います。楽しみにしています。

久米洋子（くめ ようこ）●ヒっくり　旧姓：鈴木（第25～27回／L）

自分にとって、大事なことがたくさんつまったキャンプでした。この機会にもう１度思い出してみたいと思い参加します。

栗原壯一郎（くりはら そういちろう）（第１回／L）

『一粒の種』が地に蒔かれた時

今回のお知らせを頂戴し、なぜ私にこのようなご連絡をいただいたのだろうと、正直戸惑いました。何度か読み返すうちに「秋川渓谷」の文字に気付いて『あっ！あれか』と思い出し、当時の様子が次々と頭に浮かんできた。

今回の記念行事の起点とされている『重度肢体不自由児母子キャンプ』はゼミの友人から「重度肢体不自由児を持つお母さんが、自然と触れる体験をさせられないか」と相談されているという何気ない会話から始まった。

私自身がポリオの後遺症の手術を受け、やっと両松葉なしで歩行できるようになった身であり、自然を満喫することはおろか遠足や修学旅行すら経験していない。そんな私が京都で学生時代を過ごした折、京都YMCAと京都肢体不自由児協会共催の「肢体不自由児療育キャンプ」のリーダーとして素晴らしい経験をさせてもらっていた。

加えて友人の話に関心を持ったのは、対象が重度の肢体不自由児ということだった。手足の不自由な子供は私がそうであったように、人（多くの場合母親）に支えられての生活でありそれが当たり前になってしまうことが多い。特に重度の場合その傾向が強くなってしまうことは致し方ないものの、生涯をそうした環境下で過ごすことが難しいことを考えれば、精神的な自立への備えが大切と考えていた私には『何か一つのきっかけとなるかもしれない』と感じ、友人に相談を持ち掛けたお母さんを通じ同一区内の父母の会の役員さんと話し合いのできる場を設けてもらった。

その場で重度の肢体不自由児と共に生活しているお母さん方の思いが同じであることを確認できたので、頭に描いていたプランとして「自然と触れ合う」ことに加え、『母子分離体験』を一つの大きな目標とすることをご理解いただき、プログラムを進めるにあたってお子さんは専任のボランティア2名でお世話をし、お母さん方にはお子さんが家族以外の人と生活する姿をじっくり観察し、今後のお互いの関わり方に新たな視点が加えられることを願っているとお伝えした。

重度の肢体不自由児を対象としたプログラムはこれまでに例がなく、参加母子はもとよりボランティアも初の経験であると考えられたので、より安全に安心してキャンプができるよう事前にキャンパーとリーダーのコミュニケーションを培うとともに、必要が予測されるサポートを体験的に理解することを目的とした合宿(一泊二日)を実施してから本番に臨んだ。

開催場所はできる限り手つかずの自然と触れ合うことができることを願っていたが、私の友人ご家族が運営する「秋川渓谷」のロッジでご協力が得られ、願いがかなった。

健康な人でもなかなか体験する機会の少ないアキアカネの飛び交う渓谷に降りての沢遊び、最初はやはりそれぞれに緊張があったがすぐに歓声と弾けるような笑顔に、にぎやかだった夕食後には都内では絶対に見ることのできない満天の星空の元、庭の一角で点火された小さなキャンプファイアに映し出される素敵な表情。

50年を経たとはいえ、思い起こせばそうしたショットが走馬灯のように頭をよぎる。

あの時参加したメンバーは、そして母親たちは何を感じていたのだろう？その後産業福祉の世界に身を置いている私には知る由もないが、思い出の詰まった「秋川キャンプ」が地に蒔かれた一粒の種として、多くの人に守り育てられていることを嬉しく思うとともにこの後も受け継がれ、根を張った大樹となっていくことを祈りたい。

幸野友美(こうの ともみ)　(第45・46・49回／C)

50周年おめでとうございます
一生忘れないたくさんの思い出ができました
ありがとうございました

児玉結花(こだま ゆか)　●ゆかorゆかねぇ　(第13・16・17・20～25回／L)

私世代の思い出はあの日本平…
トイレもお風呂も狭かったけど“個室”の会話は楽しかった。まだ洋式トイレが少なくて

便座を持って走った事〇〇回。トイレとは切れない縁です。
そういえば和室でビーチバレーをしたり、庭で土まみれで球技もしたなぁ。いつも土まみれ、絵の具まみれだった様な…。

小林美紀(こばやし みき)　●みりん　旧姓：本田　（第18回／L）

キャンプ50周年おめでとうございます。
30年以上前に参加しましたのに、私にまでお知らせをいただき、また、素敵なファイルとハガキまでありがとうございました。
皆様の更なるご活躍を心よりお祈り致します。

坂田英駿(さかた えいしゅん)　（第49回／C）

１番の思い出はBBQ！自分達で薪を割って火起こしもした。楽しかったよ！あと、カヌーに乗ったのが嬉しかった！ワクワクした。すっごく♡　歌も…大好き♪

出発時と、帰ってきた時の表情の変化を見て、ただただ驚きました。ハンデを持つ我が子でも、こんなにすばらしい体験が…！本当に感謝です。＜父・母＞

佐藤智一(さとう ともかず)　（第32回／C）

人生の宝物を頂いた事に“感謝”
あれから当時の年齢の二倍以上の年月が経ちました。でも多くのボランティアさんと仲間で囲んだキャンプファイヤーの思い出は、しっかり刻まれている様です。「YMCA」「山中湖」という言葉を耳にする度「フッフッ！」と笑みを浮かべます。言葉では表現出来ない息子ですが、あの様な経験を皆様のお陰で出来た事に心から「ありがとう」を言いたいです。今後の彼の人生の中でこの記憶を「糧」として豊かに生きて行って欲しく願います。

柴田知美(しばた ともみ)　●ばってん　（第36～39・48・49回／L）

子どもたちと宿泊棟で迎えた朝、食事、ボート、全体でのレク、おやすみまえの支度、すべてが今となってはいい思い出です。

そういえば、みきポンを一人でトイレ介助してはなたれにめっちゃおこられたなー（笑）私も今だったらおこるだろーなー。いろいろあったけど、皆とすごした日々は今、宝物です。ありがとう。

柴田優子（しばた ゆうこ）　●ボン　旧姓：若松　（第13・14回／L）

部屋を整理していたら40周年記念誌が出てきて、同じような文章だと駄目だな～と思ったら書けなくなり５月末の締切になってしまい焦りました。
16才で初めてのキャンプに参加させていただき今年56才の私になりました。自分の環境の変化もありましたが、キャンプに参加させていただいたお陰で、沢山の人に出会い、別れもありましたが今でも、呑み集う機会を与えてもらい幸せに思います。
又息子も2013年のスプリングに春充（はるじゅう）と言うキャンプネームをもらい、参加させていただき感謝しています。彼なりに、感じた想いを一生忘れずにいると思います。

島﨑絵里加（しまざき えりか）　（第42～44回／C）

私は、2012年の時に行ったビールルームのキャンプアルバムが大好きです。野外調理ではぎょうざを作ったり大きなスイカを丸ごとくり抜いてフルーツポンチを作りました。楽しかったです。カヌーに乗った時はメンバーの名前を呼びながらこぎました。天気に恵まれて富士山がとてもきれいに見えました。
キャンプの写真は今でも大切にしています。ありがとうございました。

高田奈歩（たかた なほ）　●ナボナ　（第13・14回／C）

日本平・高木記念山中キャンプ　50周年おめでとうございます。
私の協会キャンプ初参加は、当時の《日本平キャンプ》で小学３年の時に行った。今も覚えてるのは、結婚式ごっこ。
キャンプの楽しさを知り、大好きになった。
学生時代に夏キャンに４回スプリングにも数回行って、たくさんの仲間に出会え、今も連絡取り合い、食事したり温泉に行ったりしてます。
日本平キャンプに行けて、本当に良かったです。大切な思い出 財産です。80周年100周年、日本平・高木記念山中キャンプが続きますように…

高津雄大(たかつ ゆうだい)　●シーサー　(第41・42回／L)

高木記念山中キャンプ創立50周年おめでとうございます。自分は2009年と2010年のTMCキャンプに参加しました。現地では、バーベキューをしたり、流しそうめんをしたり、カヌーに乗ったり、長い長い山道を登って、富士山と山中湖が一望できるパノラマ展望台などにも行きました。その時、キャンプを共にしたキャンパーのみんなは元気にしているかな？
今現在(2018年)から約10年前の思い出だけど、今こうしてパソコンに向かって、色んな思い出を入力していると、キャンプでの思い出がフツフツと蘇ってきます。10年経っても忘れていない、楽しかった思い出や、素敵な思い出は、きっとこの先も忘れないのだと思います。
なにより、こうしたキャンプがこれからも続いていけばいいなと思っています。
創立50周年、本当におめでとうございます。

髙橋真由美(たかはし まゆみ)　●マーム　旧姓：桜井　(第16・18～21回／L)

日本平・高木記念山中キャンプ50周年おめでとうございます。50回キャンプのうちのほんの数回の参加でしたが、今でもいい思い出になっています。思い出すと心のあたたかくなる私の人生の１コマになっていると思います。
これからも続いていくことを祈っています。

髙橋美樹(たかはし みき)　●ペコヤ／旧姓:安藤　(第28～35･37～44･49回／L)

キャンプが大好きだ・みんなが大好きだ

日本平・高木記念山中キャンプ50周年おめでとうございます。

大学2年生の春、学生生活にも慣れてきたので何か始めてみたいと大学の掲示板を見ていると、そこにキャンプのポスターが貼られていました。たくさん貼られているポスターの中から何故そのポスターに惹かれたのかは覚えていませんが、初めて日本肢体不自由児協会へ電話した時のことは今でもよく覚えています。当時は携帯電話など普及しておらず、大学の公衆電話からドキドキしながら電話をしました。小心者の私にとっては大きな一歩、緊張していたからこそ記憶として鮮明に残っているのだと思います。よくその一歩を踏み出した！よく頑張った！とその時の自分に伝えたい。キャンプとの出逢いが、正しくはキャンプに参加することによって関わることができた人たちとの出逢

いが、多くのことを教えてくれました。

初めてのキャンプリーダー、キャンパーと4泊5日一緒に過ごしていく中で少しずつ少しずつお互いのことがわかるようになり、言葉を介さず思いが通じ合えたように感じた瞬間のなんとも言えない喜び。キャンパーとリーダーが楽しそうに過ごしている様子を見るのが何より嬉しかったキャンプスタッフ時代。懐かしのキャンパーと再会することができたオープンデーキャンプ。キャンプサイトは、みんなの笑顔・歌声・ちょっぴり涙と大きな笑い声にあふれていました。どれも忘れることができません。

私にとってキャンプは、様々な人と向き合い、そして自分自身とも向き合う時間だったのだと思います。キャンパーとそのご家族、キャンプリーダー、キャンプスタッフが一緒だったからこそ、いつもならチャレンジできないことも頑張れた。できないかなと思うことも、みんなで考えたり話し合ったりしながら挑戦することができた。もちろん失敗することもあったけど、その過程が大切であることの意味を知った。それぞれが一生懸命に目の前の人と向き合い、同じ空間を共有し、いろいろな感情を味わった。そして、関わりの中で人と人の関係性が変化していくこと、深まっていくことの面白さを実感した。

上手くいくことばかりではなかったけれど、どちらかというと上手くいかないことが多かったのかもしれないけれど、なんとかけがえのない貴重な時間だったのだろうと改めて感じます。気づけばその時間が今の自分を支えてくれています。

「♪火を～囲み～声を重ねた♪」このキャンプソングを口ずさむと胸がぎゅっとなるのですが、まさにみんなの声が、心が重なる時間だったのだと思います。私が知っているのはほんの一部ではありますが、50年分のみんなの時間が重なったキャンプに思いを馳せると言葉になりません。

キャンプを通して出逢った全てのみなさまに心から感謝しています！そして、私が生まれる前から行われていたキャンプがこれからも多くの笑顔であふれたものであることを願っております。

滝島太一（たきしま たいち）　●あなあき　（第36・37回／L）

TMC50周年　たくさんの思い出ありがとう！

田中信之（たなか のぶゆき）　●ぶうちゃん　（第11 ～ 13回／C）

思い出

日本平キャンプ並びに、高木記念山中キャンプ50周年おめでとうございます。私よりも心からお祝い申し上げます。私が初めて参加したのは、昭和54年の日本平キャンプでした。5月終わりに学校から配られる「キャンプのご案内」で申し込みました。その後はキャンプの健康診断、リーダーによる自宅への家庭訪問、キャンプの打ち合わせ会などなどがあったりしてわくわくどきどきしながらキャンプの当日を迎えたことを、今懐かしく思います。

キャンプの生活は花火や海水浴があり、宿舎でのスポーツ大会トランプをやったりして、最終の夜はキャンプファイヤーをやり、キャンプの中で1番の盛り上がると思います。今では夏になると、ユーチューブでキャンプソングを、聞き懐かしいキャンプのことを思います。

最終になりますが。これからの高木記念山中キャンプ末永く続きますようお祈りし、お祝い挨拶と致します。

谷川琢人（たにがわ たくと）　（第6・9・10回／C）

山中湖のキャンプに参加させて戴きました。あの頃は元気で成長ざかりで楽しませて戴きました。今は56才になり数年前より体調不良で入退院を繰り返しました。茅ヶ崎の施設でお世話になり自宅にも帰れない現状です。

都筑尚子（つづき なおこ）　●ラビット　（第17・18・20回／C）

学生の頃　海にはいった事が楽しかったです。

寺山　啓（てらやま けい）　●らっち♡　（第36 ～ 41回／L）

日本平・高木記念山中キャンプは永遠に不滅です！

富澤　燿（とみざわ よう）　（第44・46回／C）

小4・小6で参加しました。（高木記念）

小４は泣いてばかり、小６は、泣く回数減って楽しめました。
中学でも参加したかったのですが、かなわず、高１の今年は日程合わずあきらめました。
貴重な機会なので、もう１度参加できたら嬉しいです。

長沼哲也(ながぬま てつや)　●てつ　（第13・14回／L）

今年は大思い出会の看板等など協力できなくて申し訳ありません。山中湖センターでは、まだ木製の看板をご利用頂いているのでしょうか？
ご盛会をお祈り申し上げます。

中山　哲(なかやま さとる)　（第32・34回／C）

小・中・高・卒後もお世話になり、たくさんの楽しい思い出をつくっていただきました。
本当にありがとうございました。
これからも楽しく思い出に残るキャンプを続けていってください。　母

楢山聡子(ならやま あきこ)　●はなたれ　（第28・29・31・32・34～50回／L）

はじめてのボランティア

介護の勉強をしようと専門学校に入った年。4月に担任の小椋先生（おやかた）が、このキャンプの紹介をしており、それまでボランティアをしたことがなかった私は、「行ってみたい!!」とすぐに思いました。

はじめてのボランティア、はじめてのキャンプは、障害をもった子と関わるのがはじめてだった私にはかなり衝撃的で刺激的なものでした。このあいだ、その時にユニットディレクターだったべっちに、当時私はどんな風に見えていたのか聞いてみたところ、「う～ん、悩んでたんじゃない？」と言われました。私自身、あの時はとまどい辛かったこともたくさんあったかもしれないですが、今では楽しかった思い出しか残っていません。

はじめて一人で、今で言うディレクターのルームチーフをさせてもらったとき、中学生くらいのキャンパーを担当させてもらいました。すごく仲の良いルームで、キャンプが終わった後もクリスマス会をやったり、一緒にディズニーに行ったり、はじめてあった時は中学生だった子が学校を卒業し、社会人になり、その中のひとりの子が、実家をでて生活をすると聞いたとき、箱入り娘だった子がたくましく外の世界を広げられたの

はキャンプの経験のおかげもあるのではないか。自分達が関わっているキャンプは、障害をもった子たちの世界を広げる手助けをしているのかもしれないと、ただの自己満足かもしれませんがその時はいたく感動し、その後の私がキャンプに参加する目的は「キャンパーが自立した社会経験を送る手伝いをする」になりました。

38回、39回とプログラムディレクター（PD）をさせてもらいました。今では、あの時は本当に未熟すぎたのに、みんな、なんて心が広かったのだろうと思うばかりです。はじめてのPDの時キャンプディレクター（CD）はきっかいだったかなと思います。なんでもやっていいんだよという言葉を真に受け、準備が大変なことばかりをしていましたが、晩餐会をやったときに「今年の晩餐会が今までで一番よかった。」ときっかいに声をかけてもらったことは今でも心に残っており、キャンプを続けていく支えにもなっています。39回は外で夏祭りをやった記憶があります。とにかく大変だったことを覚えています。でもその時楽しかったと今でもキャンプを続けてくれるスタッフがいることが本当に嬉しく思います。

39回から10年後、ちょうど49回に3回目のPDをさせてもらいました。緊張しいの私がだいぶしっかりしてきたのではないかと思っていたのですが、いろいろなトラブルに見舞われ、まだまだ修行が必要だな～と感じてしまった3回目でした。これからは若手が育ってきているので、裏方にまわり、若い人たちを支えていけたらと秘かに思っています。

この原稿を書くにあたり、この22年、参加21回の年表を作り、記憶をさかのぼってみました。ところどころ記憶が抜けており、人の記憶は非常にあいまいだということも感じました。はじめてのボランティア経験から22年、キャンプで出会った仲間は100人以上。このキャンプに参加していたからこその出会いがあり、親友と呼べる人もみつけられた出会いは本当に奇跡で、これからもこのような奇跡を大切に、これまで支えてくださったみなさまに感謝をこめて高木記念山中キャンプに関わっていきたいと思いました。

西山千香子（にしやま ちかこ）　●あねご　（第38回／L）

懐かしいお名前をいくつか拝見し、楽しかった夏の思い出がよみがえりました。残念ながら今回は参加できませんが、会の盛況を願っています。
今も時々山中湖には行きます。

野口恵理子（のぐち えりこ）　●えりりん　（第37回／C）

親と離れての数日間、たくさんのリーダーさんキャンパーとのいろいろな体験（わがま

ま言ってお風呂に浮輪をして入ったことも…)、過ごした楽しい時間は娘の宝物です
～今も時々“キャンプだホイ！”を口ずさむえりりんの母～

信國桜子(のぶくに さくらこ)　(第48・49回／C)

笑顔あふれるYKC
にっこにっこにー!!

橋本慶介(はしもと けいすけ)　(第40・41回／C)

カヌーとやがいりょうりがいちばんのおもいでです。
祝！キャンプ50周年♪たくさんの　おもいでを　ありがとう!!

原山紀代子(はらやま きよこ)　(第13回／C)

学校以外の交流の場を体験したのがこのキャンプへの参加でした。
それまで知らなかった人やできごとを共有する大切な時間だったと思います。

兵頭明香(ひょうどう はるか)　●道場　旧姓：岡田　(第35回／L)

キャンプに参加して15年も経ってしまった…。今でも時々キャンプソングを歌って元気を出しています。

福島唯夏子(ふくしま ゆかこ)　(第41～43・46回／C)

娘は数回参加させていただきました。
どのときも最初はベソをかき、帰りはニコニコでした。
カヌーやお料理、お散歩、…どれも楽しかったようですが一番は、お姉さん、お兄さん、お友だちとの交流だったように思いました。皆さんとおしゃべりしたり、歌ったり、笑ったり…それが何より娘にはうれしかったようです。
これからも障害を持ったお子さんたちに、娘のような幸せな時間を与えていただけたら…と願っています。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

藤井寿子(ふじい ひさこ)　●コトブキちゃん　(第12回／C)

コトブキちゃんです。山中湖のキャンプ何回も参加して楽しい思い出いっぱい！久し振りに又参加してなつかしい思い出いっぱいしゃべりたいです。楽しみにしています。マンションで一人ぐらししています。ヘルパーさんに助けてもらって暮しています。今度遊びにきて下さい。

藤波千重子(ふじなみ ちえこ)　●おだまり　旧姓：半田　(第22回／L)

参加から30年近い時間が過ぎましたが、あのキャンプでの沢山の思い出は今も色あせていません。むしろ月日が経つほどに、その輝きや意味が増していっています。
50回は本当に凄いことだと思います。50周年に乾杯!!
そして、これからの50年に心よりエールを送りたいです。

古谷典子(ふるや のりこ)　●けろ　(第12・13回／C)

たのしい日々でした。あの日があったからこそ今の私があります。

紅谷　聡(べにや さとし)　●サル　(第19～50回／L)

「子ども達と一緒にキャンプ活動をしています」と言うと、決まって「どんな遊びをするのですか？」と聞かれる。

ビッグカヌー・野外調理・水遊び・花火…とプログラムを列挙するまでもなく、キャンプは遊びの連続である。子どもは、楽しい遊びを通して他者の存在を覚え、ルールを理解し、協調しながら成長することも事実である。遊びながら、たくさんのことを学び、成長し、心を豊かにしていくのである。

組織キャンプにおいては、キャンプは小さなコミュニティであると言われる。一方で楽しく遊びながら、他方で全体の中での役割を分担する。キャンプという小さな社会の中で自分の存在を確認し、他者との関係性を構築し、社会性や自立心を育てる場ともなる。

慣れない環境で、家族による日常生活とは違う介助に戸惑うキャンパー、オムツ換えの経験すらない中でキャンパーと笑顔で24時間生活を共にするキャンプボランティア、ちょっとだけ先輩であるスタッフは時には背中を見せながら両者を支える。我が子を他人にゆだねる保護者の心情はどのようなものだろうか。参加者の一人一人が子どもの笑

顔を念頭に置きつつ、自身も子どもに返って真面目に遊んでいるのである。

地方大学に在籍中に肢体不自由児キャンプにボランティアとして参加していた私は、当然のごとく東京でのキャンプに参加したいと思い、池袋にあった中央療育相談所のドアを開けた…。そこは、パラダイスの入口であった…などと懐古主義的な雰囲気を醸し出している場合ではない。

時を経て、自分がボランティアを迎える入れる立場になったが、個人的には、その時から時間の感覚が狂い続けたままである…。社会情勢の変化か、キャンプの魅力不足なのか、特にキャンプボランティア応募者の減少に歯止めがかからない状況に陥っている。

このキャンプで数多くの役割を担当し、自分自身の経験値と思い出は相応に蓄積されてきたと思うが、未だに「これが正解」というものは見えず、試行錯誤の連続である。反比例して4泊5日のキャンプ日程が厳しく感じられる年齢になったようでもある。

微力ではあるが子ども達の笑顔を思い浮かべながら、「～できない」ではなく「～すればできる」方向性で、遊びに真剣に向き合おう。多くの仲間とともに…。

星野明美(ほしの あけみ)　●あけっち　(第26回／C)

私が初めて、高木記念山中キャンプに参加したのは小学５年生の時でした。それから何度か参加して、ボランティアの人達やいろんな障害を持った人達と一緒に食堂でごはん食べたり、野外調理したり、ボートにのったり、とても楽しかったです。キャンプが終わって帰りのバスの中で、みなさんと別れるのがつらくて、よく泣いてました。
泣くほど私にとってキャンプは楽しくて良い思い出になりました。

正木那緒(まさき なお)　●なおちゃん　旧姓：鈴木　(第19回／L)

日本平・高木記念山中キャンプ50周年おめでとうございます。
連絡いただきまして、ありがとうございました。
今回は残念ながら欠席させて頂きます。
皆様の御多幸をお祈りしております。

真砂香織(まさご かおり)　●どんべえ　(第48回／L)

第48回TMCに少しだけ参加させてもらいました。天候はまさかの大雨！雨女の私は内心申し訳ないなと思いつつ、それでも室内での調理活動や小雨降る中でのオープニング

ファイヤーなど、まるで修学旅行に来たかのように楽しみました。印象深いのが夜勤。夜でも活発なキャンパーの子と歌を歌ったり、追いかけっこ(？)したり、改めて、子どものパワーを実感する夜で、一番濃密に関われた時間でもありました。初参加で支援者としては何もできませんでしたが、みんな優しく人のあたたかさに触れるキャンプでした。

松尾絵美(まつお えみ)　●ピク　旧姓：大谷　(第19・20回／L)

最後にキャンプに参加してから、ほぼ30年が経ちました。時の経つのは早いものだと実感しています。
色々なことがありました。楽しい思い出、苦い思い出…etc。色々ありすぎて、かえって何を書いたら良いのかわからないほどです。でも、多くの人との出会いがあって今の私がいることはたしかです。キャンプを通して知り合った方々に感謝しています。
50周年記念行事が成功のうちに終わることを心よりお祈り申し上げます。

松尾隆司(まつお りゅうじ)　(第16・17回／C)

日本平キャンプの思い出

日本平・高木記念山中キャンプ50周年誠におめでとうございます。私が日本平キャンプに参加させていただいたのは今から33～34年前に２回、当時養護学校(現・特別支援学校)の中学部の学生だった時です。今回「記念行事のお知らせ」が実家に届いたと知らせを受け、封を開けた瞬間、大変懐かしく、日本平ロッジの入り口に飾ってあったたくさんの凧たちが頭の中を駆け巡り、楽しかったあのキャンプの日々が思い出され、気が付いたら当時の思い出を文章にしたくなっていました。日本平キャンプは私にとって青春の一ページです。
当時長期間親元を離れて生活する機会など無かった私はキャンプへの参加を楽しみでもあり、また正直とても不安でもありました。そんな不安を吹き飛ばしてくれたのはみんなでたくさん歌った歌でした。「キャンプだホイ」や「いただきます、ごちそうさまの歌(線路は続くよどこまでもの替え歌)」などは30数年経った今でも自分の子供と一緒に歌うことがあります。また正式な呼び方は忘れてしまいましたがグループのお兄さんお姉さん方にもよく遊んでもらいました。キャンプ中にグループのお姉さんを好きになったり、終戦記念日？にグループで輪ゴム鉄砲を使った戦争ごっこをしていたらロッジの管理の方に非常識だとみんなで怒られたり(苦笑)、何もかもが楽しい思い出です。キャンプが

終了した後はキャンプロスになり、しばらく何も手が付けられなかったのを覚えています。
あれから30数年経ち、私は今障害当事者として障害当事者を支援する仕事をしています。思い起こせばキャンプ中にいろいろと感じたことが現在の仕事につながっているのかもしれません。この文章を作成しながら「あのお兄さん元気なのかな、あのグループのメンバーどうしているのかな」なんて次から次へと眠っていた記憶が呼び起こされてきましたが、キリがないのでここまでにしたいと思います(笑)
これからも障害を持つ子供たちがたくさんの経験ができる楽しいこのキャンプが60年、70年、100年と続いていくことを願っています。ありがとうございました。

松永尚樹(まつなが なおき)　●水虫。　(第36～40回／L)

祝　日本平・高木記念山中キャンプ50周年
色々な意味で、成長させられたと思います。訳の分からないまま、うじに言われ、きっかい・ななちん・サルと面談したのが始まりだったと思います。それから、リーダー・スタッフともに経験させていただきました。なかなか、参加できる状況ではないですが、こころはいつも山中に参加しています(笑)
都内で『水虫。』と呼ばれるのは良い思い出です。『俺たち、「TMC」』

丸山　勇(まるやま いさむ)　(第47・49回／C)

第47回、第49回に参加しました。
学校や家庭では経験できないこといっぱいの夏休みになりました。
たくさんの貴重な体験と思い出をありがとうございました。

三須美紀(みす みき)　●だんぼ　旧姓：中村　(第17・18回／L)

50周年おめでとうございます。
私が参加したのは昭和の時代でしたので早30年になります。
現在福祉の仕事に携わっていますが、その原点は、キャンプに参加させていただききっかいやななちゃんはじめ、スタッフさん、リーダーさんとのキャンプまでのプロセスや、キャンプ活動、そして、障害をもった人たちとの関わりにあります。今でも、大切な思い出です。ありがとうございました。

今後も、この活動が継続されることを応援していきたいと思います。

宮田佑紀(みやた ゆうき)　●ミヤッチ　(第33回／C)

中３の夏、最初で最後のキャンプでした。
ようやく参加出来たのに体調不良でたった１泊で帰ってきてしまい、その後も毎年申し込みましたが参加出来ず、高３の２月、誕生日の一週間前、卒業式の１ヵ月前に突然天に帰ってしまいました。
佑紀が皆さんの中でどんな様子でいたのか想像しながら何かお手伝い出来ればと思います。　母(淑子)

森山光良(もりやま みつよし)　●ももたろう／ももさん　(第18・19回／L)

ナナちん、ベニやん、ご連絡ありがとうございます。
相変わらず、いい仕事してますね。Good Job!!
30年以上前になりましたが、日本平キャンプではたいへんお世話になりました。リートレ、キャンパーの家庭訪問を含めて、すべてがすばらしかったです。今後も末永く地道に続けていただきたいです。

三木秀之(みき ひでゆき)　●みっきぃー　(第30回／C)

30回キャンプ(Aセッション)に参加したみっきぃーです。
思春期真只中14歳、体調の波があり…医療的ケアもある息子をよくぞ連れて行ってくれたなーと感謝の一言です。この案内が届き改めて、文集、写真、手紙を読み返し、本当に貴重な体験ができたこと…大切な宝物になっています。スタッフ、関わって下さったすべてのみなさんありがとうございました。
そして、現在は33歳…立派なおじさん(笑)元気に楽しく過ごしています！　母

山根伸俊(やまね のぶとし)　●ね　(第15回／L)

山根泉(やまね いずみ)　●まっちゃん　旧姓：小松崎　(第12～15回／L)

キャンプ50周年おめでとうございます。

学生時代は、リーダーやキャンパーはじめ、たくさんの仲間とつながって、ウキウキワクワクをふくらませ、より楽しく、もっと楽しくとはじけていました。
あの経験が、私共をひとまわりもふたまわりも大きく成長させてくれたと思っています。感謝です。
協会を通してつながっているすべての皆様のご多幸を心よりお祈り致しております。また、協会の益々のご発展を願っております。

横井剛之（よこい たかゆき）　●どかん　（第27回／L）

初めて参加した夏のキャンプが1995年（27回）のこのキャンプでした。重度のこどもたちと接するのが初めてだったため最初のうちは戸惑うことが多かったですが、次第に打ち解けてきて、楽しく過ごすことができたのをうっすらとですが覚えています。

吉澤　豊（よしざわ ゆたか）　●たか　（第13～27回／L）

1981年に初参加した時は男子最年少リーダーだった私も気がつけば50才台の後半。現在も何とかソーシャルワーカー養成の仕事を続けています。仕事や家庭等に忙殺され、Campの仲間とはごく一部の人々と細々としかつながっていませんが…。
最近辛かったこと。大切な仲間だった飯塚（旧姓：荒井）久仁子さんが昨年突然他界してしまったということ…。

吉野純子（よしの じゅんこ）　●じゅんピー　（第33・36回／C）

吉野純子で～す。
確か、第33回（2001/ 7）のキャンプが初めての参加だったと思います。中学部３年生でした。
以来、機会あるごとに参加しました。今でもキャンプの楽しい思い出ばかりです。当時からボランティア、サル・ヌカ・ハナタレ・ゲリP・ゲノム…、の皆さんとは今でも年賀状のやり取りをしています。
私は、就職活動を何年もやりましたが叶わず、今は施設でのパソコン入力のボランティアの傍ら、「電動車椅子サッカー」のチームで、マネジャー兼選手として、月２回の練習と、時々大会に参加しています。戦績は今一ですが。
身体にハンディキャップがあってもスポーツを楽しむ機会がもっともっと増えるといい

なぁ～と思います。皆も応援してねぇ～。

渡辺一男(わたなべ かずお)　●NaBe　(第15・16・20回／L)

やはり、兄妹そろって参加した時でしょうネ。
極力、そばに行かないようにしていたのを覚えています。

渡辺正義(わたなべ まさよし)　●べっち　(第14～23・26～30回／L)

キャンプが大好きだぁ～♪(´▽`)

歴代ＰＤ（プログラム・ディレクター）は記念文集の原稿を書くように… とサルからお達しが来た。

でもなあ、歴史を語るならカメだし、ウケを狙うならウジだし、アチキにはペコみたいに雨は呼べないし、はなちゃんのリズム感はないし……。

ま、いいや、とりあえず記憶を振り返ろう。それなら現役のリンクよりはできる
ψ(`∇´)ψ

アチキが初めてこのキャンプに参加したのは国際障害者年（1980）の翌年の大学一年生、もう37年も昔のこと。うむむ… 肉体的にはずいぶん衰えたけど、精神的には成長してないなぁ。

若気の至りというか、無知な上に無恥であったから、キャンプは楽しくありさえすれば良いんだ、なんて思っていた。だからリーダートレーニングでキャンプ理論なんてやっても、本番では起承転結もなんのその、ガンガン押し通せば良いじゃんなんてね。

今から思えば大先輩のキッカイやカメなんかには呆れられながらも、アチキの勢いだけは上手いこと利用されてたのかな、とも思う。お釈迦さんの掌の上の孫悟空みたいにね。

そんなアチキも大学卒業… と思ったら、妙な伝統を継承してしまった。他学への転進。先輩を振り仰いでもヤオミツとか、どうもキャンプ関係者には少なくない。

おまけにアチキの同世代では、のぶ兄、兄ちゃぼ、コテツにカッちゃん… と「豊作」であった。（ちなみに留年と言う別系統の伝統もあり、アチキはその流れに乗り損ねたとはいえ、未だに卒業間際に必修科目の出席日数が足りないといった悪夢を見るが、それを見事に具現化したのがゲロである）

こういうモラトリアム連中の考えることは概ね一緒で、年齢やキャンプ歴はともかく、学生なんだからリーダーとしてキャンプに行かせてよ、と。すでに事前の準備会にスタッフとして参加しているにもかかわらず、リーダー申し込み用紙を提出するなどの抵抗を

試みるも当然あえなく玉砕。正式にキャンプスタッフとして、キャンプの運営やリーダー育成に携わることになる。

スタッフとなっても本当はこれまで通りハジけるだけで終始したい、というのは本音でも、やっぱりキャンプの全容が見えてくると、キャンプの理論云々はともかく、子供たちの体調やリーダーとの関係性の変化などに配慮して、メリハリのあるキャンプ展開なんてことが頭から離れなくなる。

それに自分がトレーニングの時にレクチャーすることになりますからね、受講する時以上に勉強しなくちゃ。

そして思い当たるんですわ、リーダーの時はただただハジけてるだけの自分だと思っていたけど、先輩方によって上手いことキャンプ全体のメリハリの中に嵌め込まれていたことを。

やがてベムや女王様(男性です、念のため)といった、キャンプは楽しけりゃイイじゃん、と思っている「困った」後輩も参加してきた。

そうなるといい気なもので、自分がリーダーの頃は軽く見ていたキャンプの理論と実践とか、グループワークとかが面白くなってくる。多少なりとも経験も積んでますからね、後輩相手に実験もしてみたり。

そして何より理屈や常識ではくくれない「例外の大切さ」が実感できるようになってきた。

ウジが好きな言葉に「アクシデントいらない、ハプニング大歓迎」てのがあって、これはことにキャンプにぴったりだと思う。もう一つ突っ込めば、アクシデントも出来るならば楽しんじゃおう、かなとかね。(アクシデント＝事故にも幅がありますし。おちゃらけて誤魔化してはいけないけれども、事故のインパクトを子供たちのキャンプ生活に影響を与えてはいけない、そうしたことを前提として、ハプニングの方向へいかに吸収するか)

実際思わぬ出来事のないキャンプなんて詰まらないしね。

そんなハプニング、例外を楽しむには、トレーニングの理屈っぽい側面は、実はとても頼もしいツールだったんだなと気がつく。理屈などを通して現実を知るほど例外の面白みがわかる。

楽しくなけりゃキャンプじゃない、と言い訳しながら好き勝手やってたリーダーの頃。でも本当のキャンプの楽しさはキャンプ全体に気を遣ってこそ分かる、と気がつき出した新米スタッフの頃。

そしてもっと広い視野を持つことの重要性は、それまでのキャンプ経験と、リーダー、スタッフ、子供たちや親御さんたちとの交わりの積み重ねから、いつの間にやら自然と

浮かび上がってきた。

そう、視野を広げれば…

残念ながら現在でも、障碍、障碍者というのは例外的な存在ではある。でもそんな例外的な存在と交わるのはとてもダイナミックで心も頭もバリバリに刺激を受けることでもある。

……初めて日本平でこのキャンプを経験してから37年、あまり精神的な成長の見られないアチキには、でも、もしかしたら伸び代がまだまだあるのかもしれない… なんて先日の50周年記念デイキャンプに参加して改めて思ったりもしたのさ。だって、本当に楽しかったんだもん！

ん？ 未熟な人間と伸び代とは別物だって？？？？ ((((;゜Д゜))))))))

（なお、あえて「障碍」の表記を使っております。これは協会やキャンプとは関係なく、私個人としての意思表示です）

渡辺真理（わたなべ まり） ●いかちゃん 旧姓：川中 （第16・19～21回／L）

キャンプで出会った仲間と今もつながっていて支えられています。キャンプは私の人生に大きな変化と恵みを与えてくれた貴重な経験でした。
ありがとうございました。

渡邊茉莉（わたなべ まり） （第35～37回／C）

チャルとごはんたべた
ペコとごはんたべた
チーコとプールはいった

綿 祐二（わた ゆうじ） ●うじ （第20～32･36～41･43･44･46･47回／L）

TMC 50周年に寄せて～回想～

これほど、自分の人生の中に入り込んだ『出会い』は他にはない。

1988年夏、池袋の決して奇麗ではない雑居ビルで出会った。その出会いのまま、日本平の山奥で「ひとつの目標」のための活動が始まっていた。「療育キャンプ」である。

ただ、子どもたちの笑顔だけのために、これほどの大人たちが浮世離れしたバカ踊りを繰り広げる。そこに、人生の分岐点があったかもしれない。

多くの障害児やその家族、それを支えるボランティアたちと出会い、別れがあった。ただ、この夏の何日間がそれぞれの人生に何らかの影響を与えていると信じている。この活動は、自分のための活動でもある。

ある年、キャンプ場で車いすの一本のネジがはずれ、移動の際にガタついた。一所懸命、あたりを探すが見つからない。ひとりのスタッフが「ちょっと、東京まで戻ってくる。朝方には帰るから…」とキャンプ場から離れていった。次の朝、車いすは、ガタつかなかった。彼は、一本のネジを東京まで取りに行っていた。彼は、涼しい顔をして「このネジがないと、この数日間、このキャンパーはつらいよね。ガタガタしてさぁ」と言う。この一瞬に全力をかけること、忘れてはいけないことを学ぶ…。

「やんちゃで、無謀で、楽しければいいじゃんで、ルールを守らない(記録もまともに出していない)」若い頃の私は、とにかく子どもたちの笑顔をつくることに全力を尽くしていた。縦横無尽に動き回っていたのに、いつもそこには「ブルーシートが置かれ」「水分補給のお茶が置いてあった」、迷子になって困ったときでさえ、迎えがあった。目が合えば、次のことがわかる仲間たち。さりげなく、知らぬ間に、『支援されていると思わせない支援』…学んだ。

20歳前半で鹿児島からキャンプに参加して、今年で30年近くなる。当時、遠方から通っていた若輩の私は、お金がなかった。転々と仲間の下宿に宿を求め、時には池袋の公園で朝まで缶ビール片手に仲間と「福祉談義」もした。

その中、大先輩である彼は「おいしいもの食べさせてやるよ」と言って、日々、ご飯をお腹いっぱい食べさせてくれた。いつも食事に連れまわってくれ、人生で初めて食べたものも多い。時が経ち、私も社会人になり、普通に生活ができるようになった。40歳になる時であろうか、彼と久しぶりに食事をして、今後の「このキャンプの在り方やキャンプディレクターの話」をされた。長い間、「楽しむキャンプ」から「意図を持った楽しむキャンプ」へ変わった瞬間でもあった。帰りのお勘定でお金を払おうとすると「うじには、絶対払わせない」「おれが飯食わす」って…。彼との食事はおごられっぱなしだった。その彼はもういない。

晩年、病床で「関係性は、専門性を凌駕するぞ!!」福祉の研究ばかりやっていた当時、痛い言葉でもあった。今でも忘れない。背中をみて、育った。

障害者の家族の中で育ち、なかなかその事実を外に言えなかった自分が、今では障害者福祉の教員であり、障害者施設の経営者でもある。やっと、堂々と「自分の家族が障害者です」と言えるようになったのも、他の障害者や家族にも「当たり前のことを当たり前に」「何とかなるよ」と言えるようになったのも多くの『出会い』からである。

このキャンプには、『感謝』しかない。ありがとうございます。

療育キャンプ事業等の変遷から現在

本会が主催する療育キャンプは、当初は、在宅の肢体不自由児の外出の機会や貴重なレクリエーションの場であると同時に集団での生活体験を通して社会性を養う場となっていました。

時代を経て、「障害のある子どもたち」が、「豊かな自然の中」で、「他人と協調」しながら、「集団生活」を行い、「興味」・「関心」・「達成感」・「向上心」・「努力」・「成長」などをキーワードに、かけがえのない体験となることを確信し開催されています。ひいては、共にキャンプを創り上げてくれる、ボランティア（リーダー・スタッフ）を育成することにより、療育の理念・思想の普及、啓蒙活動となる事業となっています。

また、これらのキャンプは「組織キャンプ」として実施されています。組織キャンプとは、豊かな自然環境の中で、訓練された指導者（＝研修を重ねたキャンプボランティア）のもと、目的を持ったプログラムを体験しながら共同生活することです。

現在は、日程的には３日から６日程度ですが、非日常的な濃密な時間をキャンプ参加者全員で共有し、有意義な思い出となり、生涯を支えるかけがえのない体験（Sustained experiences）となることを願っています。目的をもったプログラムの実施に向け、役割分担を明確にし、詳細に準備していくことが特徴です。

昭和32年「手足の不自由な子どもの海浜キャンプ」

～肢体不自由児キャンプの嚆矢～

昭和28年にポリオの子どもたちの海水浴を中心とした日本初の障害児キャンプが小豆島で行われ、水の浮力で肢体が自由を取り戻す視点から、参加していた整形外科医師が翌年の整形外科医学会にて『日常生活や診察室では見られない、笑顔・動き・喜び表情を伺えた。海水の浮力で自信をつけ、泳ぐことができる子どももいた。診察室でははかれない効果がある。』と発表されたことを機に、昭和32年、本会が日本基督教奉仕団と共催し、東京大学整形外科学教室の協力を得て、千葉県富津海岸にて夏休み中の中学校校舎を借用し、９泊10日（中日オープンデー含め）、参加児童28名（以下キャンパー）、指導者28名で「手足の不自由な子どもの海浜キャンプ」を開催した。キャンパーの半数以上がポリオの子どもたちで海水浴を中心としたプログラムを展開した。

平成30年８月で第62回を開催した「手足の不自由な子どものキャンプ」へと引き継がれている。

※延べ参加児童数約3,800名、ボランティア約3,600名（リーダー・スタッフ）

昭和40年「中央療育相談所親子キャンプ」開催

高木記念日本平ロッジにて開催（昭和49年まで）した。

昭和41年「肢体不自由児雪上教室」開催

昭和39年の東京オリンピック後に開催されたパラリンピック東京大会を契機として、山形県

蔵王樹氷原ロッジにて、東京YMCA、毎日新聞東京社会事業団、NHK厚生文化事業団と共催＜昭和48年に東京YMCA共催を中止＞、「きびしい寒さと雪の中で、楽しく遊びながら、子ども達に障害を克服する自信と自立の精神を養い、社会復帰へのひとつの歩みとすること」を目的とし、スキー、ソリ等のプログラムを東京・千葉・神奈川・埼玉の肢体不自由養護学校（現：特別支援学校）単位で昭和60年まで開催した。80年代に入ってから養護学校の生徒たちの障害が重度化するなど次第に運営の難しさが増し、第20回をもって終了せざるを得なくなった。
※延べ参加児童約650名、ボランティア約800名（スタッフ・リーダー）

昭和41年「在宅重度肢体不自由児とボランティアの集い」開催

障害が重いため、日ごろ外出する事や社会活動に参加する機会が少ない肢体不自由児・者が、ボランティアとの交流を通して、豊かな友情と相互の理解を深めることをねらいとし、送迎ボランティアの協力を得て昭和63年まで開催。ディキャンプとして、BBQやオリエンテーリング、室内でのお祭り等の催しを行った。（通称：クリスマス会）
※延べ参加児童約1,100名、ボランティア約1,800名、愛の手有志会（個人タクシー）
によるボランティア・ドライバー約480名、その他付き添い約130名
平成元年からは「みんなでつくるクリスマス会」とし、平成26年まで開催。
※延べ参加児童・生徒約360名、保護者約40名、ボランティア約700名

昭和44年重度脳性マヒ青少年のための「日本平ロッジの集い」開催

東京都肢体不自由児父母の会連合会と共催。後に、肢体不自由青年および同世代の青年が共同生活を通して様々な問題について考え、話し合いながら創造的なキャンプ生活を営む過程の中で、相互の連携と理解を深め、社会的な視野を広げることをねらいとした、統合キャンプの形態をとり、昭和51年には「ユースキャンプ」と名称を変え、本会単独主催となる。
参加者すべてが、同レベルのキャンパーという形で、野外での自主的な生活を営むに至り、秋元湖のキャンプ場や山中湖センター等キャンプ地を変え、昭和55年に名称を「モビリティキャンプ」として開催し、幕を閉じる。
※延べ参加肢体不自由青年約260名、一般青年約160名

昭和44年「重度肢体不自由児母子キャンプ」開催

～日本平・高木記念山中キャンプへ～

本会が発足させた家庭奉仕員制度の在宅重度肢体不自由児童の家庭を訪問している家庭奉仕員の自主的な活動の中から、前年に品川区の個人宅にて７名で行われたカレーライスパーティーと称する集団合宿の体験から集団生活の必要性が唱えられ、参加児童９名、ボランティア17名、父母７名、２泊３日の日程で秋川渓谷にて行われた。
昭和45年（第２回）には高木記念日本平ロッジへ場所を移し、昭和46年（第３回）には「重度肢体不自由青少年と親のキャンプ」と名称変更、当初は、母子関係の問題を主に考えて、母子分離のプログラムの中でキャンプを楽しもうというものであった。昭和51年（第８回）からは児童のみの参加となり名称も「重度肢体不自由青少年のキャンプ」と改称。
昭和52年（第９回）には、対象者の増大、高齢化のために、低年齢層と高年齢の二つのセッ

ションで行った。昭和53年（第10回）は山中湖センターにて開催し、翌54年（第11回・国際児童年）からは、同じ児童の参加が続き社会的な批判もあり、家庭奉仕員家庭のみならず一般公募とし、小学３年～高校３年とした。
昭和55年（第12回）からは、障害の種類・程度による区別をなくすため「日本平キャンプ」と改称し、昭和56年（第13回・国際障害者年）には、ABC（５泊６日／２泊３日／５泊６日）の３セッションで実施するなど、その年代のニーズに応じた日程・規模で開催した。
昭和54年（第11回）からNHK厚生文化事業団が共催＜平成15年（第35回）より協力団体に変更＞となる。平成３年（第23回）よりキリン福祉財団が協賛団体として加わる。
平成６年（第26回）に高木記念日本平ロッジ閉鎖に伴い、山中湖センターへ場所を変更し「高木記念キャンプ」と改称、平成7年（第27回）以降、「高木記念山中キャンプ」として開催している。（現在も継続）
※延べ参加児童数約1,700名、ボランティア約2,500名（リーダ・スタッフ）、保護者約50名

昭和50年「スプリングキャンプ」開催

養護学校（現：特別支援学校）を卒業して、就労･授産施設への通所等もままならない時代、家庭で日々を送っている人たちに、社会的集団生活の機会を与えようと高木記念日本平ロッジにて始まった。単に外出の機会を増やすということにとどまらず、障害をもっている青年が日常生活でかかえている問題や、個々の生活目標を集団生活を通して明確にし、自身の障害の客観的な認識と、社会との関わりを再度確認してもらい、自立へのステップとなるような集団生活を試みた。
平成7年（第21回）からは山中湖センターへ場所を移し、参加対象者の障害の重度化も伴い、集団生活を通して相互に協力する事や個々の創造性を高め友情を深めていく機会をねらいとし、更に保護者のレスパイト的要素を加えて行っている。（継続）
平成23年（第37回）は、開催に向け準備を進めていたが、東日本大震災の影響を考慮しやむなく中止した。
※延べ参加青年約680名、ボランティア約1,040名（リーダー・スタッフ）※第７回からの集計

昭和52年「フレンドシップキャンプ」の開催

前年に「手足の不自由な子どものキャンプ」20回の記念事業として行われた「リ･ユニオンキャンプ」（保護者・兄弟児参加）での健常児とのコミュニケーションが良いとの評価のもと、「障害児と健常児の統合キャンプ」としてスタートした。障害児37名、健常児42名、ボランティア27名。東京YMCA、東京青年会議所の共催、本会後援で始まり、昭和57年から主催に加わる。
その後、平成14年（第26回）より、NPOフレンドシップキャンプが主催団体となり、本会はキャンパー・ボランティアの募集選考関係の事務や健康審査会・キャンプ本番の医療スタッフ派遣を行う後援団体として協力している。（現在も継続）

平成２年「雪と遊ぼう：親と子の療育キャンプ’90」開催

本会、NHK厚生文化事業団、毎日新聞東京社会事業団の共催で、新潟県大和町の浦佐スキー場にて開催。昭和59年まで開催されていた「肢体不自由児雪上教室」終了後、療育センター職員

有志により行われていた「雪ん子キャンプ」の視察等、研鑽を重ね、小学生限定とし、雪遊びの機会がなかなかもてない肢体不自由児が雪山の自然の豊かさを学び、集団生活での交流を深め、また、保護者同士も同時にスキー等を楽しみ、児童の療育について学ぶ機会を併せもつ、唯一保護者も参加するキャンプの企画となった。移動には公共交通機関（上越新幹線）を利用し、親と子は別の宿舎で生活し、小学生ならではのつかず離れずの親子分離の体験となる。

平成５年（第４回）からは、南魚沼市の八海山麓スキー場に移し、平成12年からは大和町（現：南魚沼市）の後援を得て開催している。（現在も継続）

※延べ参加児童数約640名、保護者約600名、ボランティア約1,420名（リーダー・スタッフ）

平成22年「チャレンジキャンプ」開催

「手足の不自由な子どものキャンプ」の後半に同時開催。４泊・５泊の長期キャンプには不安を抱いている低学年や比較的障害の重い子ども達を対象に、楽しいキャンプ体験をして、次には長期のキャンプに参加したいと自信をつける機会とし、初めての参加を限定に、２泊３日で行う。現地集合・解散とし、保護者にキャンプ場や先にキャンプインしている手足の不自由な子どものキャンプの様子を垣間見ていただき、理解を深めることを目的とする。平成23年（第２回）からは、手足の不自由な子どものキャンプの１グループとしての位置付けとなる。（現在も継続）※延べ参加児童数約60名、ボランティア約60名（リーダー・スタッフ）

（当協会75周年記念誌より引用）

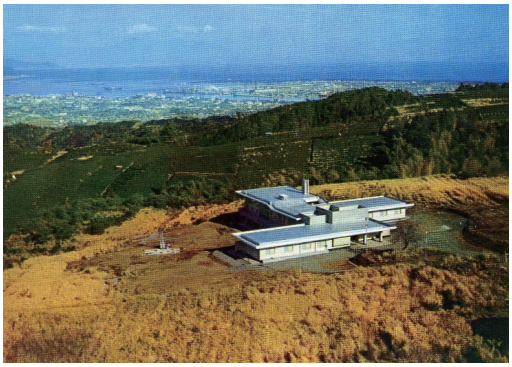


写真１　高木記念日本平ロッジ　（全景）

写真２　重度肢体不自由児母子キャンプ　（昭和44年）

写真３　第49回高木記念山中キャンプ

写真４　東京ＹＭＣＡ山中湖センター　（平成29年）

キャンプのあゆみ

回	期日		日数	場所	名称	キャンプディレクター(CD) プログラムディレクター(PD)	参加児童							リーダー			スタッフ			父母	合計	備考
							小	中	高	在宅	男	女	計	男	女	計	男	女	計			
1	昭和44年 1969年		2泊3日	秋川渓谷	重度肢体不自由児母子キャンプ					9			9			17				7	33	家庭奉仕員制度対象者にキャンパーを募る。リーダーはホームヘルパーが大半で、前年の品川区における合宿を基盤とする。母子分離の目的を持つ（子どもとホームヘルパー、親同士のグループワーク）
2	昭和45年 1970年	7/22（水）～24（金）	2泊3日	高木記念 日本平ロッジ	〃					11			11			27				7	45	体験させることのプログラムを重視する。海水浴・キャンプファイヤー etc.
3	昭和46年 1971年	7/28（水）～30（金）	2泊3日	〃	重度肢体不自由青少年と親のキャンプ					13			13			32				6	51	
4	昭和47年 1972年	7/31（月）～8/2（水）	2泊3日	〃	〃					15			15			32				6	53	医師の参加承認を仰ぐ
5	昭和48年 1973年	7/26（木）～28（土）	2泊3日	〃	〃					16			16			30				7	53	
6	昭和49年 1974年	7/24（水）～26（金）	2泊3日	〃	〃					15			15			32				7	54	
7	昭和50年 1975年	7/31（木）～8/2（土）	2泊3日	〃	〃					19			19			31				3	53	
8	昭和51年 1976年	7/26（月）～28（水）	2泊3日	〃	重度肢体不自由青少年のキャンプ					17			17			30					47	児童のみの参加
9	昭和52年 1977年	7/27（水）～29（金）	A 2泊3日	〃	〃					17			17			35					52	選択プログラムを導入。中学生以下と高校生在宅者とのセッションにわける。参加申し込みの増大。
		7/29（金）～8/1（月）	B 3泊4日							15			15			38					53	
10	昭和53年 1978年	8/16（水）～18（金）	2泊3日	東京YMCA 山中キャンプ場	〃								51			60					111	参加希望者の増大に対応するため、山中湖で行う。
11	昭和54年 1979年	8/16（木）～18（日）	A 2泊3日	高木記念 日本平ロッジ	〃	CD：飯笹義彦	20	7			18	9	27	12	16	28	5	4	9		93	"家庭奉仕員登録児童から対象を一般公募とし、小学3年から高校3年までとした。国際児童年。11NHK厚生文化事業団との共催。（以降、継続）
		8/18（日）～21（火）	B 3泊4日					8	20	1	15	14	29									
12	昭和55年 1980年	8/3（日）～8（金）	A 5泊6日	〃	日本平キャンプ	CD：飯笹義彦	7	11	10		13	15	28	17	15	32	3	2	5		95	国際障害者年準備のキャンプとして、長期5泊6日の組織キャンプを設ける。参加申し込み人数の兼ね合いからA・B2つのセッションを設け、リーダーの負担軽減から中1日の休暇をおく。リーダーは同一リーダーとした。障害の種類・程度による区別をなくすため名称を改める。
		8/10（日）～15（金）	B 5泊6日				5	15	10		15	15	30									

回	期日		日数	場所	名称	キャンプディレクター(CD) プログラムディレクター(PD)	参加児童							リーダー			スタッフ			父母	合計	備考
							小	中	高	在宅	男	女	計	男	女	計	男	女	計			
13	昭和56年 1981年	7/27(月)～8/1(土)	A ５泊６日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦							29			23					52	国際障害者記念事業として参加対象者の枠を広げ、比較的障害の重いという事で長期は無理だと思われている子ども達に、２泊３日でのセッションを設けた。リーダーの確保に苦労することが予想されたので、A・Cは同一キャンプとし、Bを受け持つリーダーと２つのグループに分けた。
		8/1（土）～3（月）	B ２泊３日										28			32					60	
		8/3（月）～8（土）	C ５泊６日										30			32					62	
14	昭和57年 1982年	7/31(土)～8/3(火)	A ３泊４日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：亀岡淳一・高橋光彦	15	8	7		15	15	30	11	11	22	10	6	16		98	２つのセッションを設けたが、リーダーは同一とし、リーダートレーニングの負担軽減をはかった。『ある子ども達の夏休み』映画取材協力。
		8/5（木）～10（火）	B ５泊６日				8	13	9		15	15	30									
15	昭和58年 1983年	7/30(土)～8/2(火)	A ３泊４日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：落合崇志・亀岡淳一	11	7	10		14	14	28	10	10	20	11	9	20		96	
		8/4（木）～9（火）	B ５泊６日				7	11	10		15	13	28									
16	昭和59年 1984年	7/27（金）～30（月）	A ３泊４日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：高橋光彦・亀岡淳一	11	7	10		15	13	28	12	12	24	9	6	15		95	
		8/1（水）～6（月）	B ５泊６日				8	7	13		14	14	28									
17	昭和60年 1985年	7/29(月)～8/1(木)	A ３泊４日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：亀岡淳一	8	9	8		14	11	25	11	11	22	9	9	18		90	
		8/3（土）～8（木）	B ５泊６日				8	10	7		12	13	25									
18	昭和61年 1986年	7/26（土）～29（火）	A ３泊４日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：亀岡淳一・奈須野正幸	10	9	3		12	10	22	8	15	23	10	10	20		89	
		7/31(木)～8/5(火)	B ５泊６日				4	13	7		12	12	24									
19	昭和62年 1987年	7/31(金)～8/3(月)	A ３泊４日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：亀岡淳一・吉澤　豊	9	10	3		12	10	22	8	14	22	13	10	23		93	
		8/5（水）～10（月）	B ５泊６日				5	15	6		13	13	26									
20	昭和63年 1988年	8/11（木）～16（火）	A ５泊６日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：亀岡淳一・吉澤　豊	5	8	11		13	11	24	8	12	20	10	10	20		89	
		8/18（木）～21（日）	B ３泊４日				11	9	5		13	12	25									
21	平成元年 1989年	8/15（火）～19（土）	４泊５日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：亀岡淳一	4	9	9		11	11	22	8	11	19	11	13	24		65	
22	平成２年 1990年	8/8（水）～13（月）	５泊６日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：亀岡淳一	6	8	10		13	11	24	8	10	18	11	14	25		67	
23	平成３年 1991年	8/11（日）～16（金）	５泊６日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：亀岡淳一	7	9	8		12	12	24	9	10	19	12	14	26		69	キリン記念財団(現：キリン福祉財団)が協賛(以降、継続)。
24	平成４年 1992年	8/12（水）～18（火）	６泊７日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：綿　祐二	6	8	9		11	12	23	10	10	20	15	15	30		73	
25	平成５年 1993年	8/12（木）～16（水）	６泊７日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：亀岡淳一	9	8	8		12	13	25	10	8	18	14	12	26		69	
26	平成６年 1994年	8/11（木）～15（月）	４泊５日	東京ＹＭＣＡ 山中湖センター	高木記念キャンプ	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：亀岡淳一	9	8	8		12	15	27	10	15	25	14	10	24		76	山中湖へ開催場所を移す。宿泊棟利用。
27	平成７年 1995年	8/10木）～15（火）	５泊６日	〃	高木記念山中キャンプ	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：亀岡淳一	9	9	9		13	12	25	12	11	23	11	9	20		68	
28	平成８年 1996年	8/12（月）～17（土）	５泊６日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：紅谷　聡	9	8	9		14	12	26	12	12	24	18	12	30		80	
29	平成９年 1997年	8/13（水）～18（月）	５泊６日	〃	〃	ＣＤ：飯笹義彦 ＰＤ：紅谷　聡	8	8	8		13	11	24	9	15	24	14	14	28		76	
30	平成10年 1998年	8/10（月）～12（水）	A ２泊３日	〃	〃	ＣＤ：紅谷　聡 ＰＤ：渡辺正義	9	7	3		11	8	19	9	15	24	14	15	29		95	
		8/14（金）～17（月）	B ３泊４日				8	7	8		11	12	23									

回	期日		日数	場所	名称	キャンプディレクター(CD) プログラムディレクター(PD)	参加児童							リーダー			スタッフ			父母	合計	備考
							小	中	高	在宅	男	女	計	男	女	計	男	女	計			
31	平成11年 1999年	8/9（月）～11（水）	A 2泊3日	〃	〃	CD：飯笹義彦 PD：紅谷　聡	10	6	5		10	11	21	13	14	27	15	16	31		103	
		8/13（金）～16（月）	B 3泊4日				6	5	13		12	12	24									
32	平成12年 2000年	8/4（金）～6（日）	A 2泊3日	〃	〃	CD：紅谷　聡 PD：綿　祐二	9	7	3		10	10	20	11	14	25	15	16	31		100	
		8/8（火）～11（金）	B 3泊4日				6	10	8		12	12	24									
33	平成13年 2001年	7/31（火）～8/3（金）	3泊4日	〃	〃	CD：紅谷　聡 PD：金子　正	8	7	9		12	12	24	9	15	24	17	15	32		80	
34	平成14年 2002年	8/24（土）～26（月）	A 2泊3日	〃	〃	CD：紅谷　聡 PD：金子　正	10	8	5		12	11	23	13	14	27	15	21	36		109	第11回からのNHK厚生文化事業団共催を終了。（以降、協力団体）
		8/27（火）～30（金）	B 3泊4日				8	10	5		12	11	23									
35	平成15年 2003年	8/22（土）～24（月）	A 2泊3日	〃	〃	CD：飯笹義彦 PD：紅谷　聡	10	8	4		12	12	24	13	14	27	14	16	30		103	日本肢体不自由児協会の単独主催となる。
		8/26（火）～29（金）	B 3泊4日				6	3	13		10	12	22									
36	平成16年 2004年	8/20（金）～22（日）	A 2泊3日	〃	〃	CD：飯笹義彦 PD：金子　正	9	12	1		11	11	22	12	16	28	12	12	24		96	
		8/24（火）～27（金）	B 3泊4日				5	7	11		11	12	23									
37	平成17年 2005年	8/22（月）～24（水）	A 2泊3日	〃	〃	CD：綿　祐二 PD：磯部詩乃	14	5	4		12	11	23	13	12	25	17	14	31		102	
		8/26（金）～29（月）	B 3泊4日				5	7	11		11	12	23									
38	平成18年 2006年	8/15（火）～19（土）	4泊5日	〃	〃	CD：綿　祐二 PD：楢山聡子	10	11	7		13	15	28	12	12	24	19	20	39		91	
39	平成19年 2007年	8/26（日）～30（木）	4泊5日	〃	〃	CD：綿　祐二 PD：楢山聡子	12	11	11		17	17	34	12	12	24	19	20	39		97	山中湖センター宿泊スペースをキャビンに変更。
40	平成20年 2008年	8/19（火）～23（土）	4泊5日	〃	〃	CD：綿　祐二 PD：安藤美樹	14	12	9		17	18	35	17	15	32	18	19	37		104	
41	平成21年 2009年	8/18（火）～22（土）	4泊5日	〃	〃	CD：上原奈奈 PD：安藤美樹	9	15	10		16	18	34	12	15	27	20	20	40		101	
42	平成22年 2010年	8/17（火）～21（土）	4泊5日	〃	〃	CD：上原奈奈 PD：安藤美樹	9	11	15		19	16	35	15	16	31	14	19	33		99	
43	平成23年 2011年	8/17（日）～25（木）	4泊5日	〃	〃	CD：上原奈奈 PD：安藤美樹	18	6	13		19	18	37	17	15	32	19	17	36		105	
44	平成24年 2012年	8/19（日）～23（木）	4泊5日	〃	〃	CD：上原奈奈 PD：安藤美樹	12	12	12		18	18	36	15	16	31	18	18	36		103	
45	平成25年 2013年	8/18（日）～22（木）	4泊5日	〃	〃	CD：上原奈奈 PD：加藤拓也	10	10	13		15	18	33	14	15	29	17	18	35		97	
46	平成26年 2014年	8/17（日）～21（木）	4泊5日	〃	〃	CD：上原奈奈 PD：加藤拓也	10	12	14		18	18	36	12	15	27	15	20	35		98	
47	平成27年 2015年	8/17（日）～21（木）	4泊5日	〃	〃	CD：上原奈奈 PD：加藤拓也	10	12	14		18	18	36	12	15	27	14	20	34		97	
48	平成28年 2016年	8/21（日）～25（木）	4泊5日	〃	〃	CD：上原奈奈 PD：加藤拓也	8	11	10		10	19	29	9	16	25	19	18	37		91	
49	平成29年 2017年	8/22（火）～26（土）	4泊5日	〃	〃	CD：上原奈奈 PD：楢山聡子	10	10	8		11	17	28	9	17	26	20	18	38		92	第23回より継続してきたキリン福祉財団の協賛終了。
50	平成30年 2018年	8/12（日）～16（木）	4泊5日	〃	〃	CD：上原奈奈 PD：菊地　謙	10	8	11		14	15	29	12	20	32	17	19	36		97	
													1751			1428			1098	43	4320	

編集後記

50回・50周年といえば、節目の年にあたります。何か記念行事をと心に秘めた数名が集まったのが、昨年12月でした。

集まったメンバーの妄想から、①第50回高木記念山中キャンプ中に『オープンディキャンプ』開催、②秋頃に『大思い出会』の開催、③記録としての『記念誌』の作成、とお題目は挙がるものの、実際に企画・運営するのは誰が？いつ？どうやって？という厳しいスタートとなりました。

日本肢体不自由児協会主催行事として、記念事業実行委員会メンバーが企画・運営を担う形で事業を進めました。

50回キャンプの現役メンバーが多く兼任し、一方では50回TMCの運営、他方では50周年記念事業に追われることとなりましたが、キャンプを支えているベースは『人』であり、財産であることを実感しました。

50年間の参加者一人一人の期待に応えられたかは我々には判断が難しいところです。不備な点も多々あったことと思いますが、ご寛容くだされば幸いです。

50年の来し方を振り返り、今後もこのキャンプを継続していけるよう、皆さまのご支援・ご協力をお願い申し上げ、結びの言葉にかえさせていただきます。

主　　催：社会福祉法人 日本肢体不自由児協会
企画・運営：日本平・高木記念山中キャンプ50周年記念事業委員会

実行委員長：楢山聡子

実行委員：朝山智美・礒部詩乃・小椋喜一郎・加藤拓也・金子　正・亀岡淳一・川原京子・菊地　謙・木田ちひろ・楠本彩奈・久米洋子・児玉結花・小山友里江・髙橋美樹・田中美紀・寺山　啓・中桐萌果・紅谷夢咲・村山晃史・山下暁子・山下太郎・渡辺正義・綿　祐二

事務担当：上原奈奈・紅谷　聡

日本平・高木記念山中キャンプ 50周年記念誌

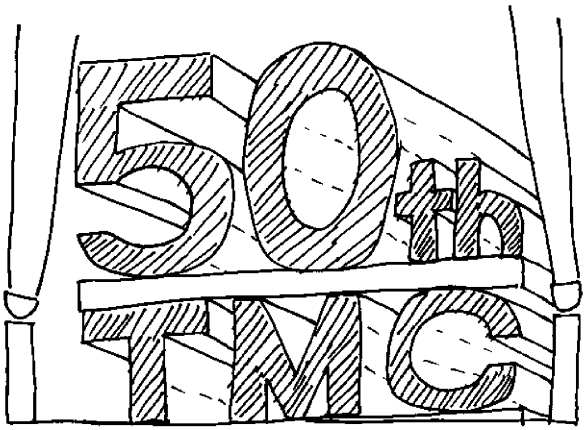
編集・発行　社会福祉法人日本肢体不自由児協会
日本平・高木記念山中キャンプ
50周年記念事業実行委員会

〒173-0037　東京都板橋区小茂根 1-1-7

印　　刷　研精堂印刷株式会社

発　行　日　平成30年（2018 年）10月

表紙デザイン：木田ちひろ（せん）　裏表紙デザイン：村山晃史（くさ）


50th
FMC